

# 統一

第九十七號要目

- 勸信要義(承前)……………本多日生  
▲彼れは出でよ此れは退けよ……………松尾忍水
- 統一問題と其人物……………記者  
▲道德問題に就て……………笹川篁堂
- 日蓮大聖人(第七回)……………關田養叔  
▲小會氏の披瀝文を評して……………冷眼熱眼生  
▲松本氏の辨明書を紹介す……………
- 統一論壇の一小論文村上博士の……………古定不新  
▲妙乘旅行感慨記(承前)……………影山懸雲
- 清澄山改宗と上總七里の新團結……………新無名氏  
▲師弟の情誼……………秋葉純一
- 千江子の信……………不新  
▲松平五峰、水野梅塙、成島毅舟、秋葉純一等の詩歌……………
- 須らく靈に於て大に富むべ大に豊べし……………本成院  
▲千葉縣、作州、金澤、等通信……………
- 法華經の佛性……………鈴木孝頌

(明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可  
 公三十二年五月十五日發行統一第九十七號 毎月一回十五日)

大法主二位僧都日什大正師御遺文

前管長大僧正錦織日航師題字

大僧正 小林日至師 編輯

大僧正 本多日生師

## 本宗綱要

和装頗美本  
 實價金三十五錢  
 郵税不要

- 嘗て佛海の大波瀾を奔騰せしめたるものは本書なり
- 四箇格言問題を爆發せしめたる大主動者は本書なり
- 佛教各宗協會をして畏懼狼狽せしめたるは本書なり
- 綱要編纂委員の心膽を寒むからしめたるは本書なり
- 妙宗教義の神髓を發揮して組織的に系統的に詳細説述して餘蘊なきは本書なり
- 殊に四箇格言の一章、設け恐れず憚らず念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊諸宗無得道の旨を痛論して一種獨特の光彩を放てるは本書なり
- 讀め、須らく讀め、眞佛教の眞意義を知らんと欲するものは自他宗の僧俗を問はず悉く本書を讀め、

發行所

東京市淺草區新谷町  
 顯本法華宗 宗務廳

## 法の鼓

本誌は頗る愛らしき小雑誌なり

本誌定價	
一部	二錢
壹年ヶ前金	二十錢
十部以上	一錢五厘宛
五十部以上	一錢二厘宛

本誌には祖訓、説教、小談、和歌等あり

今般統一團より本誌を毎月一回發行致し只の印刷費のみにて  
 お求に應ずる事に致しましたから何卒篤志の御方は檀家又は  
 知人へ施本席として御買求め下さい澤山印刷すれば其だけ價  
 を割引ますから積々御注文を乞ふ  
 ○今日の良布教方法は

「法の鼓」を  
 施本するに限りませす、小供でも婦人でも假名さへ讀める人  
 は讀んで解る良雑誌  
 ○施本には限らず本誌購讀方もお勧め下さり

東京淺草南松山町  
 統一團



# 彼れは出でよ此れは退けよ

忍水

之れを惰眠の人とは謂はず。暫し臥龍の卿等は、最早山野より去るの時なるに。清香馥郁の熏醉も醒むるを促さずや。綠樹清翠の涼味も飽きを來さずや。紅葉清溪の仙境も愛より離れずや。噫々銀裳の轡轡も眼に眩ゆからずや。さて卿等が永き駢聲を聞く間に、あらゆる面襟を具したる惡魔は、躍れり、狂へり。かくて正義の領域は日に縮まるなり。惰夫も起つ時機、況や義の士や。嗚起せよ卿等。恰も良。今や隠れたる卿等が出づべきの好時機なるよ。之れを輕躁の人とは謂はず。優に活動し給ひし卿等は、最早疲勞より休むべきの時なるを。市の風塵は餘りに起ちたり。野の砂礫は餘りに荒れたり。而も卿等の叫ぶ聲は聽への迄に噎れたるなり。涙と血とは無き迄に迸出したるなり。さて卿等が熱ある働を見る間に、人は曰く稍其聲ならずと。かくて狂躁浮動。輕舉盲動を以て邪徒は嗤笑するなり。元氣充實せる猛者も暫し忍ばんに。徐退せよ卿等。恰も好。今や疲れに勞れたる卿等は、退て滴水だに沾れたる腦池を豊かならしめよ。

## 統一主義

### 勸信要義 (承前)

本多日生口述  
山根顯道筆受

(1)

第五節 祖書に顯はれたる諸種の勸信説の組織系統  
第三節に於て説述するが如く、各種の宗教思想を啓發するは平等慈悲を以て本分となせる佛教徒の一日も忘るべからざる所なれば、隨て衆生設化の上に顯はるゝ勸信談に於ても、幾多の方面を生ずるは、自然の結果なりとす、吾聖祖日蓮上人は佛教統一の大志願を立て、分岐多端なる異宗論争の惡僻を一掃し、佛教々相論に於ける紛義を解決し、佛教教理論に於ける衝突を斷破し、佛教行門論に於ける眞假を分判し、佛教感應論に於ける利益の源流を明示し、由て以て統一の旨歸を明にせり。故に我宗學上にありては異宗徒に對し佛教の教相を論し、若しくは佛教の教理を闡はすに當りては、曾て門下の學說に異見を生じたることなし、又佛教の行門論に於ても感應論に於ても、未だ曾て大途を逸せざるなり、然るに翻て内部の信徒を感化するに至りては、全く之に反して、異

見百出し、殆ど立宗の大途を失して、異端の邪徑に走るもの、如し、是れ眞乎護法の人士が中心より悲痛すべき所ならずとせんや、

吾聖祖の勸信に關する教訓を稽查するに、其方面の多端なる容易に排列し難きものあり、暫くその三五を擧げんに佛法難遭の思想を鼓舞して信仰を勸説するあり、妙法經力の難思議不可量なるを説きて勸信するあり、或は佛力の不可思議を説き或は預言の適中を説き、或は人生の無常を説き、或は成佛の決定を示し、以て勸信するあり、又或は罪障の重過を示して信仰に依りてその消除と救へ、又或は善惡因果の條然たる規律の貫通せるを説き、善念と増進せしめ以て信仰の必要を教ゆるあり其他文字即佛の妙を談するあり、佛語の不虛を説くあり、思親の情に訴ふるあり、妻子の聖愛に托するあり、淨土の体相を欣慕せしむるあり、時には現世の冥福利益を説き、又時には人生名利の頼むに足らざるを教ゆるあり、その推理の思想に關しては、宇宙の實相を紹介し、時に唯心説の方面より説き來り、時に色心不二論に入り、又佛陀の實在に論到し、慈悲を説き智慧を説き活動を説き福徳を説き感應を説き行化を説き因縁を説き、斯くして信念を啓發助長せしめんとす、この他諸種の勸信法門に就て示教利喜し給ふ、其數幾十條たるを知らず、

それ斯くの如く僅にその一例を擧ぐるも、聖祖勸信の教訓は、



甚だ多面に施設せられたるを知るべく、若しこれ等勸信の教訓を布教上に應用するに當りて、何等の系統をも考査せず、何等の組織をも商量するなくして、任意に之を敷演せば、其教義は假令誤謬にあらざるとも、又其布教は一部士女の間で感化を興へたりとすも、我教學の上に於ては、全く狭劣暗昧の非難を辞するを得ざるのみならず、廣く社會全般の布教に稽へ、永く將來の興敗を思は、大に猛省警覺を要すべきものあるを知るべし、何となれば社會全般に普及せしむるを以て、大目的となせる世界普通の宗教は、幾多の國家を通し、幾多の生民に及ばし、その教義の版圖は如何に廣闊なるも其教徒の員數は如何に多數なるも、其宗教の發足點即ち動機は如何に多方面なるも、その異なる幾多の社會を通じしもの優降ある諸種の階級を貫きて、溶融統一せしむべき根本的第一義の教義關係あるべければなり、この根本的の信念に進ましめ、この溶融統一せる信仰を把持せしむるには、如何なる方面より發足し來るものも、皆最後の安住を一にすべきことと知らざるべからず、加之、宗教の効用は多數人民の分離せる思想を統合一せしめ、その結合方に依りて社會各般の改善を決行し、地上にありて美花を開き、現世にありて美果を結はしむべく希望するものなれば、種種なる勸信法門は、畢竟各方面より來る多數の人數を漏さず根本的の信念に歸一せしむるにあること、恰も大都會の海よりも陳よりも、東

西南北四通八達、普く集合來着せしむるが故に、繁盛を極むるが如けんのみ、

祖書に顯はれたる勸信の教訓は、實に多方面なれば、その組織系統を按排調整することは、尤も緊要の研究たるを疑はず、若し從來の宗徒が爲し來れる如く、僅に勸信談の一部一局を固執し、何等の按排をも考査せずして無謀なる布教に放任せば、幾多の地方を別にし階級を異にせる信徒相互の間には、信仰上の衝突を生み、同一教義の下に歸向せるものとして、全く異教異宗の如き觀を呈せしむるに至る、而して之か爲めに氣脈の貫通を欠き、團結の勢力を失ひ、感化の事、興教の望、共に蹉躓に歸すべし、是れ豈に忽緒に附すべきことならんや、茲に不肖大に警悟する所あり、聊か研究の方法を新にして、勸信談の組織系統を考査し、信仰の紛雜を調理し、由て以て感化興教の上に、多少の貢獻を試みんことを期せり、固より充全なる研鑽を遂げたるものにあらずれば、決して今日の講究に満足すべきにあらずるは言ふと俟たず、只この種の様式に於て研究の緒を開くに過ぎず、若し之に由てこの種の講究説明の様式をして層一層發達せしめば、他日充全なる結果に到達すべければ、不肖の念願も亦満足するの日あるを知るのみ、

今言ふが如く祖教に於ける勸信談の組織系統に就て、充全なる按排を採り調整を遂ぐるは、事容易ならず、この至難の研

究に對し、不肖が研鑽の一部を紹介するを得るは、余の一大幸慶として、自ら祝福する所なり、先づ圖を掲げて後にその關係を説くべし

勸信談の二大方面

- (1) 佛陀の絶待無限を基礎とするもの
- (2) 佛陀の功徳を基礎とするもの
- (3) 佛陀の慈悲を基礎とするもの
- (4) 佛陀の智慧を基礎とするもの
- (5) 佛陀所證の原理を基礎とするもの
- (6) 佛陀所説の教説を基礎とするもの
- (7) 前各項の二個已上を錯綜して起るもの
- (8) 前各項の二個已上を錯綜して説くもの

(2) 吾人の宗教心に訴ふる諸種の勸信説

- (1) 佛陀觀を説いて宗教心と起さしむるもの
- (2) 實相觀を説いて宗教心を起さしむるもの
- (3) 人身觀を説いて宗教心を起さしむるもの
- (4) 因果律を説いて宗教心と起さしむるもの
- (5) 先人の事蹟を説いて宗教心を起さしむるもの
- (6) 前各項の二個已上を錯綜して説くもの

已上圖示する所の第一佛陀の絶待無限を基礎として起る諸種の勸信説に就て、二種の區別すべきものあり、一は認識已上に於て絶待無限を直覺し仰尊するものにして、二は認識の結果として絶待無限を確信するものに属す、佛陀に對し研究の

結果其偉大なる体用智慧等に感觸して信仰を起す者は、第二の部類に屬し、何等研究を積まざるも、佛陀は本來難思議無限の境界より、人類を救済するか爲めに降誕し給へるものなれば、固より吾人思量の域を絶したる大覺者なりとして、信仰尊すべきを説くは、第一の部類たるを知るべし、この二種の別は勸信上に於てその道程に別異の觀あらしむるも、結局佛陀の絶待無限を基礎としたる信念に安住するに至るべし、故にこの二種を概括して大別の第一の部類に攝することを得べし、而して佛陀の体相と力用と功徳と慈悲と智慧と所證の理と所説の教と其他の勸信説とは之を詳説することは、各論に譲りて今は委悉に之を説かず、大別第二の吾人の宗教心に訴ふる諸種の勸信説に就ても、復認識より來るものと、認識已上に屬するものとの二別あり、又吾人の宗教心に就ては理性に訴ふるものと、情懷に訴ふるものと意力を鼓舞するものとの別あり、その佛陀觀と實相觀と人身觀と因果律と先人の事蹟と、その他勸信説とに於ける、詳細なる説明は、下の各論に至りて、之を説述すべし、今は祖教に顯はれたる勸信談中、重要な教訓に就て、その系統組織の基礎を明にし諸種の勸信説に於ける按排を知るを得は足れり、この排列に就ては前々節に掲げたる、天台智者の列擧し給へる十種の發心を對照すべし、近時新佛教と稱するの徒、漫りに佛教革新と叫ぶも、畢竟佛教勸信の談道の古來二大方面の共存して、



自在に運用施設せられたるを知らざるの言議を弄するに過ぎず、佛教は教導感化の方術、真に全備せり、只佛教徒の應用を忽緒に附して、勸信談の組織系統を考察せず、一局一部の説明に拘泥して、他面の説明との關係を遺却したるは、全く警覺せしむるの必要あるも、何を新佛教徒の如き態度に出づるを要せんや、彼れ新佛教徒の方針は、勸信談の二大方面の第三面に流れて第一面を無視するものなり、從來の佛教徒の大部分は第一面をのみ尊重して、第二面を閉却せるものなり、故に二者共に偏狭の失を脱せず、吾人は廣く人類の各階級を濟ふに當りては、佛教應用の方式に前記の二大方面を共存して、有智無智共に安住せしめ、度脱せしむべきものたるを主張せずんばならず、この二大方面の共存配合と會得し、充全なる感化を廣く社會の各層に普及せしめんと欲せば、方便恵と眞實恵との關係を知り四悉運用の妙機を契會せざるべからず、敎家鍛練の要此に存し、敎家修養の訣亦此に在り、偏狭暗昧自ら足れりとするの徒は、到底今後感化の事を語るに足らず

(次續)



### 統一問題と其人物

#### 各面評論

統一問題は實際問題なり理想問題にあらざる也、今や統一問題の趨勢は如何なる程度にまで進み來りしか、彼等の多くは統一問題と以て今尙理想問題視して茫漠として捕捉し難き觀念を追ひつゝあらざるか、儀式信條の末節細目に氣を奪はれて明白にして大膽なる新組織案を發表する能はざるか、斯くして統一問題は愈々現實と遠ざかり先きに理想的に意識されたるものは遂に空想的に意識さるゝに到るなからむや、今や吾人の解釋は極めて單純也、即ち統一問題は實際問題として解釋せられたり、實際問題とは行動を意味し直接を意味し手と足とを意味し健全なる頭腦と意味す、健全なる頭腦とは何ぞや手と足とは何ぞや直接とは何ぞや行動とは何ぞや是等の多くは皆相携へて統一問題の周圍を擁する人物を意味せずや、然り確に人物を意味する也、

今や吾人の宗團統一問題は餘りに多くの時間を過して餘りに其聲を屢繰返したるそれに比較して其丈の効果を収むるの餘りに少なきの恐なきか、吾人は是を宗團統一問題を動す

人物の位置聲望氣力精力信用に歸せざる可らず、何となれば彼等の位置聲望氣力精力信用は確に宗團統一問題を右せしめ左せしめ西せしめ東せしむる丈の主權なれば也、彼等の位置にして聲望にして氣力にして精力にして信用にして強きと弱きとは同時に宗團統一問題に強き響きと弱き響きとを與ふる也、宗團統一問題の過去か其時間と其聲とに比較して効果を収むるの餘りに少なきの恐れあるは彼等の信用精力氣力聲望位置が弱くして或は弱き響を與へたるにはあらざるか、而も吾人をして明白に白狀せしむればはむしろ此間の消息を斷するに感ふ、

然しながら今や宗團統一問題の周圍を擁する人物は其宗團に於て皆一流の所謂剃刀者流ならずや、日蓮宗の脇田堯惇氏安國會の田中智學氏顯本法華宗の本多日生氏は夙に獨立したる見識と信仰とを具へて此問題に對して二流三流四流五流の徒より多大なる輿望を荷ひつゝある一流者流ならずや、而も近來此等三氏の態度を見るに吾人はや、怪みの聲を心の奥に潜ましむるの苦痛を覺へざるか、脇田堯惇氏か錦輝館に於て日蓮宗と顯本法華宗との合同問題に關して督促的の書面を送られたりといふ事は事實ならずや、而して次の「日宗新報」即ち此問題に對して二流の位置にありて而も脇田氏よりも熱心に見ゆる加藤文雅氏の主筆たる「日宗新報」は次の「日宗新報」に於て脇田堯惇氏は此書面を欣然快諾されたりといふ喜ぶべ

き報導をもたせり、喜ぶべき報導は喜ぶべき結果をもたらさざる可らず、合同問題に就て重大なる責任を負へる脇田堯惇氏の欣然快諾の四字は何等喜ぶべき結果をもたらさざるにあらざるや、吾人は此に於て思ふ、既に督促的書面を發するに到りし此が裏面の消息は合同問題の半面に何等か一種惡思潮の流れ居るに起因せずや、若果して然りとすれば「日宗新報」の欣然快諾の四字も字字義通りに解釋するの吾人は餘りに正直なるにはあらざるか、問題は進歩開展の域に入れり、善意の思潮惡意の思潮は今や幾條となく流れ込みたり、識らず脇田堯惇氏は惡思潮を代表せむとするか善思潮を代表せむとするか、日蓮宗の外交舞臺を負ふて立てる脇田堯惇氏にして時代と場合と輿論とを看破するの力量と見識と信仰とを以て日蓮宗の宗是を定めて猛然として躍り出づるの勇氣なくんば抑も多大なる宗教的勢力經濟的勢力を有する日蓮宗を如何せむや彼等は終に何處よりか吹き來る新敎權の熱と信との風になびき倒されずんばやまざる也、

若夫田中智學氏に到つては如何、宗團統一問題に對しての氏の態度は尤も明白也、氏は明白に退きたり即ち日蓮宗と顯本法華宗との合同問題の主點と遠ざかれり、而も吾人の記憶すべき點は氏か抑も日蓮宗改革論者の當初よりして宗團統一問題の主唱者なりし事と、すぎし卅五年の宗徒大會には其身幹事長として議長席に就き合同問題の提出せらるゝや尤も熱



心なる賛成者の一人なりし事は也、かゝる記憶を有する吾人は宗徒大會ありたる後數月を過ぎて田中氏か主筆なる「妙宗」に於て合同問題は本多や田中の喧物にされるなりとの不可思議の聲を耳にするとの意味を列ねたる文字を見たり、而して氏は合同問題の主點と違さかれり、吾人は惑ひたり、考へたり、判したり、かくて吾人か判じつ、考へつゝ、惑ひつゝある間に、田中智學氏は安國會を提けて大阪に走れり、氏は何故に大阪に走りしか、氏は廿三年間の研究を披露せんが爲に大阪に本化宗學研究大會を開きたる也、氏は今や實の世界より想の世界に入れり、學者となりたる也、教授となりたる也、而も田中智學氏として先に「妙宗」に列ねたる如き言を吐かしめたるは抑も那邊より來りたる聲なるか、合同問題が果して喧物となりて終るものとすれば此か周圍を擁する主要人物は皆相携へて簞食者にあらざるか、本多日生氏田中智學氏か主なる人物ならば同時に脇田堯悖氏も主なる人物にあらずや、而も彼のみをいひて此のみをいはざるは或は田中氏を此合同問題の主點より遠ざからしめたるものにあらざるか、曾て日蓮宗の舊勢力舊教權を咒阻したる田中氏は今や却て安國會の新勢力新教權を先の舊勢力舊教權より咒阻されたるにはあらざるか、よし一步を進めていはいはしむれば日蓮宗と顯本法華宗と立正安國會との三角鼎立が合同問題に對して幾許の輕重ありや、田中智學氏は道般の消息を觀察して合同問題

の結果が他人の爲に嫁衣を縫ふの愚に陥らざらん事を或は恐れつゝあるにはあらざるか、他人の爲に嫁衣を縫ふ、是は卅五年の宗徒大會に於て合同問題の提案者たる清水梁山氏に依てむしる堂々として迫られたるにあらずや、清水梁山氏は合同問題の成果の後は潔く安國會の解散を斷行すべしと迫れり、清水氏か安國會解散論は田中氏をして合同問題に對して焉んぞ他人の爲に嫁衣を縫ふの自覺を起さしめずしてやむべきぞ、安國會の解散は疑もなく田中智學氏の自殺なり、半世江湖に放浪して一枝の筆に其位置と聲望とを造り上げたる清水梁山氏は、今も單獨なる身を以て田中氏の安國會を見ればさしたる重大なるものとは思はざるべしと雖も、田中氏にとりては安國會はそれ自身の宗門也、よし田中氏か安國會の新勢力新教權を其形式を解散して其實質を提けて日蓮宗に再び僧籍を有するに到るとするも、其新勢力の範圍は舊勢力の範圍と相對して未だ田中氏が安國會を解散したる價值に必當せざるや明白也、さもあらばあれ、吾人は田中氏か大阪に開ける本化宗學研究大會に向て延山の武田宣明氏池上の加藤文雅氏が多大なる望みを厲し將來統一問題の解決者は此大會より出つるとなし一方ならざる筆を尤も敬しく染めたるを見たり識らず田中氏の過去の態度を見たる吾人は「教友」と「日宗新報」の言に首肯するとも世人は敢て怪みの聲を放たざるべしか、抑も田中氏にして心機一轉を學んで合同問題の爲にむ

しる明白に大膽に安國會の解散を敢てし而して猛然として身延池上中山へ肉薄して其新勢力を植付けんとする勇氣あるか、吾人の三たび思ひを致さざる可らざるは此點也、彼顯本法華宗に於ける本多日生氏に到つては抑も此問題に對して如何なる態度をとりつゝありや、氏か昨卅五年十二月發刊の「統一」に於て論じたる合同問題に對する意見か此問題に對して最近の意見なりとすれば、氏は此問題に對しては明白に積極的方針を取るものゝ如し、勿論格言問題でふ雲を起して本多日生氏自身か龍となりて宗教壇上を走り廻りたる時よりして氏の主義は統一主義なりき、其佛教教理論に於ても其佛教本尊論に於ても、其佛教信仰論に於ても、氏は積極的に統一主義を忌憚なく發表せる一人なりき、昨卅五年の宗徒大會に於て日蓮宗と顯本法華宗との合同統一の問題か議決せらるゝや多大なる希望と信仰とを新たに起したるものを數ふるとすれば五指を屈する中の第一指は必ずや氏ならざる可らず、然り氏は統一主義の消極的部面として日蓮門下の宗團統一問題に向て尠からざる希望と信仰とを湧かしたりき、而も一方の對手たる脇田堯悖氏は大會議決の責任と茫然漠然の間に委し去りて督促的の書面を發せらるゝ迄に此問題の爲に餘りに惱を使役すべく熱心ならざるにあらずや、而も同時に田中智學氏は道路の聲を自から署名したるページに書き出して此問題の主點と違さかれ、斯くして問題は容易に開展せざ

りき、然れども時は破壊ともたらし建設をもたらし惡魔を招き美人を天降せしむ、時なる哉、時なる哉、顯本法華宗に於ける卅五年の政變は本多日生氏をして高きみ空に提げ去りて管長事務取扱とならしめたり、破壊をもたらし惡魔を招きたる時は建設をもたらし美人を天降せしめたり、時の心は餘りに不自然なり否自然なり大ひに自然なり、時の心は餘りに不調和なり否調和なり大ひなる調和なり、氏は此重に立ちて疑もなく顯本法華宗の統治權を握れりかくて合同問題に對す如何に心地好き限りにあらずや、氏の合同問題に對する見識と信仰とは益々牙へざる可らざる也、脇田田中本多の諸氏は合同問題を擁する重なる人物也、是以太利半島統一の三傑に比す、ガリバルディーは誰ぞや、マデニーは誰ぞや、抑もガグールー其人は誰ぞや、若夫以太利統一の素地たるサルジニヤ王國に到つては何處ぞや、日蓮宗か安國會か顯本法華宗か抑も亦他の興門八品の宗團か、吾人の以太利半島は幸にして奧太利の權なし、されどよし兵力は借らずとするもナポレオン三世は確に必要なり、昨年の中智學氏はナポレオン三世の觀ありき、されど氏は終に革命的のマデニーに歸れるにあらずや、辨護士より出でたる松本群太郎氏新聞記者より出でる清水梁山氏は合同統一問題の提案者としての因縁を以て此問題の現在及び未來に向てナポレオン三世たる能はざるか、脇田田中本多の諸氏彼等は互ひに



サルジニヤ王國たらんとせり、彼等は互ひにガヴールたらんとせり、而して一の熱心なるナポレオン三世なきに到つては抑も此問題を如何せんとするか、合同問題までを生むに到りし宗徒大會の起原を尋ねれば疑もなく紀念大會なり紀念大會を以て生むに到りし起原を尋ねれば橘香會一派の運動に歸せざる可らずて歸納論理と以て吾人は中川觀秀氏等を如何に見るべきか、氏等は合同問題の歴史的因縁と以て直ちにナポレオン三世たる能はざるか、顯本法華宗に於て策士の名ある今成乾隨氏は如何に多くの鬼謀神策を携へて此問題の火の手を擧げんとするか、

統一問題を擁する明星は茲に盡きたるにあらざる也、吾人は先學者の態度を見ざる可らず、日蓮宗の小林日董氏守本文靜氏清水龍山氏河合日辰氏等の重なる學者は如何に此問題を思惟しつゝありや、顯本法華宗の阪本日垣氏山崎日暉氏錦織日航氏板垣日暉氏齊藤顯一氏等は如何に此問題を思惟しつゝありや、學者は學者らしからざる可らず氏等が合同問題に對して學者としての意見を發表するはむしろ當然の義務ならずや、若夫宗友會に出席する新進人たる學者は何等の方針を以て教理研究の歩調を進めんとするか、合同問題の成果に或るものをもたらずべく宗友會の精神は決せざるか、「雙椀學報」と「旂檀」とは單純なる學報として顯れたるか、統一主義の學見は日蓮主義を通じての眞理也、然り「雙椀學報」と「旂檀」

檀」どの裏に隠れたる青年諸氏は合同問題に對して何等の意見と有せるや、將亦他に新らしき何物かを自覺せるか、學者をして今少しく此問題に接近せしめよ、而して彼等をして其義務を盡さしめよ、何となれば學者の意見は實際的行動者にとりて此上なき好材料好參考たれば也、

若夫延山の武田宣明氏に到つては如何、文才學才うれ二つながらと有してや、重きを爲せるは氏也、卅五年に於ける宗團の活動に促されて出でたる氏は確に何となき一種の空氣に洗禮を與へられたり、氏は終に自覺したり、氏の筆は終に合同問題の肉と骨とを論せざればやまざるの態度を示せるにあらずや、

統一問題を擁する大星小星、舊人物にして強大なる手腕を有せるもの、新進人にして敏活なる頭腦を有せるもの、是等は互ひに相携へて經となり緯となり合同統一てふ美しき織物を織り出さざる可らず、只吾人の講究すべきは宗門一大事勸告書となり宗會諸員の遊説となりたる手續的運動よりも、むしろ宗制已上に此問題を溯上せしむる事是也、即ち日蓮宗の管長濱日蓮氏と顯本法華宗管長事務取扱たる本多日生氏とは精神的に互ひの宗團を日蓮上人の御前に捧げて、而して後向下的に是が成果の運動に出でざる可らず、かくて問題は尤も單純に進行し、煩累をさまで多く生ませずして美しき織物は織り出さるべき也、

今や第二回の宗徒大會は五月下旬を以て大阪に於て開かるゝと傳へらる、彼等の多くは再び何事を議せんとするか合同問題の趨勢は明かに看取せられて手と足とは此大會に於て決せらるべきか、清水松本の兩氏は此か提案者として抑も如何なる感慨を抱いて此會に列せらるべくや、吾人は今より多大なる希望を第二回の宗徒大會に屬するに躊躇せじ、

大坂の中村福助父子東京に來りて日蓮記を演じ神田八講は總見に忙殺せらるゝ間に、日蓮門徒の宗徒大會は大阪に開かれんとす、福助は舊日蓮記を演じ日蓮門徒の大星小星は新日蓮記を演せむとす藝術を見るに多くの趣味を感ずる吾人は今より愉快と感しつゝあり(記者)

男子決意あれば則ち果斷を生む、果斷さは快刀なり、快刀を揮ふ所、妙計奇策神速敏活の太刀風あり、鬼神も近づく可らず況や乱麻を裁つ何ぞ難き、勇り出よ、乱麻に似たる今の宗界へ、予が即ち決意ある快男子の(忍水)

宗 教 文 學

日蓮大聖人 (第七回)

佛城 關 田 養 叔 講演

昔の人が能く願に繩を掛けたり股に錐を刺したりして睡りを防いで學問を致したといふが、蓮長師が學びの窓の若みは昔の人にも劣らぬ程であつた、

蓮長師が、御一人の佛陀の教法に於て色々に分れて居ると云ふ譯は無い必ず一道に歸らねばならぬと云ふ疑ひを起すと共に、學問修行の天眼目とせられたのは「佛法の中の顯密の經文の中で佛陀の御本懐に叶ふて而して了義であつて、易々と佛に成る所の法を求めたい」といふにあつたのである、

一切經を讀み初めてより、先づ華嚴經を讀み了らば、阿含經方等經、般若經と順々に讀み、夫れより如來の御本意を説き顯はして魂魄を留められたる法華經を讀み了り、大略佛の説教の次第も解り、脈絡歸趣も明かになりました、引き續いて涅槃經を讀み了らば、此の經を讀んで蓮長師が最も肝に銘みしたのは、「法に依て人に依らざれ」と云ふ佛の嚴誡であつた、これは佛滅後になれば、種々な法師が出て、佛教に無いところ



の自分理屈を製造したり、又は、教理の浅い經文に迷ふて終ふて、而も、いゝ加減に口の先きで人を誑す様な宗旨が幾らも出来るから、そこで御陀が、如何に貴い人でも菩薩でも荷も經文に證據の無い以上は、其の人師の語を用ひてはならぬ、吾が説き置いたる法……即ち經文に依て之れを證據として辨別を決けるよと誡められたのである、運長師は、此の金言を見せして「嗚呼八宗十宗と宗旨は數多いけれど悉く經文に背き佛の御本意に戻りたるこそ如何にも慨かほしき次第である」と暫時が程は涙に咽びました、

また同じ經文の中に、末世になると佛法の浅い深いの教相をも明めずして、經文を牽強附會て、色々宗旨を立てる輩があるといふことをば、釋尊が一つの譬喩を以て諭されたところがある、それは「一匹の象があつた、盲人が大勢集つてこれを探つて見て、象の耳を探つた盲人は、象といふものは丁度箕の如きものだといひ、腹を撫でたものは象は太鼓の様だ……尾を捻つたものはイヤ箒の如きものに違ひない……足を抱いたものは桶の様なものだと、盲目滅法で何でも各々自分が探り當たるところを少しも間違はぬものだと思ひ込み象の形體の全体を知ることが出来ない……」と斯うある、佛法に宗旨が分れて互に自分勝手なことを主張して居るのは數多の盲人が互に感違ひなことを言ふと同じで、佛敎の全体を知らないからである、運長師は、これらの譬喩を見るに付

けても「釋迦世尊は、二千餘年の其の昔に於て、今日八宗十宗と分れ乱るゝ有様を徹見し給ひしか、運長不肖なりといへどもこれより猶獅子奮迅の勇を振つて佛の經文を鏡として一代佛敎の大衆の形を見定めん、徒らに凡僧人師の敎に踟躕するのは佛の御本意でない」と、茲に一層の奮發心と起しました、

運長師は、今やこの清澄の山に在る書物も悉く讀み盡し學び尋ねる師匠とてもなく、又我が上へ出る學友もありませぬ故、空しく此の片田舎に居て貴き月日を過して終ふも惜いことであるのみならず、斯くては吾が志す大願も成就することはい出来ない、依てこれより幕府の膝元なる鎌倉へ出て諸宗の高僧碩徳に就いて佛法を尋ね吾が知解を助けんと、運長師これより諸宗遊學に志します、

この頃の鎌倉の執權職は北條泰時であつて、この人は性質至つて賢く亦温順で、下民臣僚に憐惠を懸け、國の政道に心と注ぎ、記録所の門には鐘を掛けて置いて、人民に鳴させて不時の訟を聞いたといふ位で、諸種の規則なども拵へ、夫れから奢侈を禁じ儉約を奨励め、此の外萬事政治に注意いたしました、然し先代の時政や義時などは随分惡逆無道なる舉動をいたしまして、恐れ多くも己れ陪臣の身でありながら、天子様を流罪に致すなど、實に惡みて餘りある程の罪蹟を遺してあるのですが、泰時己來、時頼でも時宗でも、世に賢君

明相と評判されて國を治めることには種々苦心をして人民を可愛がつたのである、時頼などが斯くも政治に心を用いたのは、自分の先祖が罪惡を遺してあるから、天下の志士義人は悉く之を憎み、動ともすれば叛かんとする状態であるから、そこで恩恵を以て人民を手馴けると云ふ政略であらふと思はれる、ろは兎に角、泰時は非常に政道に心を注ぎましたから文武の道も進み佛敎も盛んになり御寺も建立される偉磊坊さんも澤山に四方から集つて参りましたのである、

運長師は、鎌倉に赴いて各宗の明師に就て、諸宗の教義を尋ねんものと、時しも仁治三年の秋の頃、師匠の道善密師に暇を乞ひまして、房州を出で上總より下總にかゝり武蔵野に出たといふから現今の東京方面を通行したのでありませうこれから鎌倉の手前なる帷子の宿に着き、日も早や暮れかゝりたした故、何れへか一夜の宿を乞はんものと思ふ折、或る家の門口に立つて「旅の御僧、これへ参ひられよ、一夜の宿を致さん」と呼び止めます者が有るに依つて、運長師大に喜び家に入りまして、圍爐裏の側に座りて燃火に手などを暖ります、

家の主人は佛壇に向つて御念佛なきを唱へて居たが、これも終りまして種々と四方山の雑談の末、運長師は、主人に向ひ「今宵は計らずも一宿を致し誠に忝ないが、夫れにつけては……其れなる子供の弄器箱の中を見れば、角兵衛獅

子やヒョットコ面や其の外色々の遊戯物のある中に、一体の佛像があるからあやしんで取り上げて見れば、こはいかに、勿体なくも我等凡夫を救ひ給ふべき大聖釋迦牟尼佛の御立像にて手足も折け鼻も闕け、あはれ見る影も無き有様は何たる勿体なきことなるぞ、佛法歸依の此の家には、最も似氣なき合點の行かぬことでは御座らぬか……」と尋ねれば、主人は笑ひながら「イヤ旅の御僧の御不審は道理至極なれど、實は拙者も初めの程は、佛といへば同じ釋迦様、御經といへば何れも同じさものだと思ふて居りましたが、近頃鎌倉にて生如来と仰められたる大阿上人と申す尊い御方に遇ふて受戒なし念佛往生の安心をさきました、一切經いろゝの經文は澤山あれど、末代愚痴の我等凡夫の修行には、南無阿彌陀佛に超したものは無い、若しも御釋迦様藥師如来などに心を寫して拜んだり唱へたりするならば、禮拜雜行とて、修行の穢れとなり往生は遂げ難いもの、夫れ故に諸種の神や佛を抛げ棄て、一向に念佛誦名するならば、彌陀の淨土に滿るゝことは無いと御經に明白に書き記してある由……されば天台眞言諸宗の名僧知識でも、さては無智の匹夫下庸の者どもでも唱へぬ者はない、斯る尊き御敎を聞き家に歸りてこれまでの釋迦の佛像を捨るも惜いと思つたはせに、戸棚に隠に置いたのを、いつの間にかやら小童らが持ち出して笛や太鼓に獅子と釋迦とを踊らせて遊んで居りますから、用なげ佛よど其のまつ



打ち捨て置たまふのこと」と、主人が鼻を高くして話すのを聞いて、連長師は、あきれ果て、暫時が程は語もなく「嗚呼何者の邪僧ぞ此の娑婆世界の教主たる本師釋迦世尊を捨て、無縁の彌陀を禮拜めよなどと世の中の人を迷はするか」と悲み、兩眼に涙を浮べて大に歎きまする、連長師は猶も語を續き「サテ御主人、拙者は房州小湊の浦の清澄といふ寺院の僧なるが、熱々經文を開いて見るに、御釋迦様は、此の娑婆世界の教主にして、我等を助け救ひ下さるべき佛である、經文の中にも、今此の三界は釋迦一佛の有ち給ふ領分にして、其の中の衆生は悉く我が子なり、而も此の處諸の患難多し我れ獨り能く救ひ護るとある、これに引き換へ彌陀と云ふ佛は此の娑婆世界には縁の無い佛、それのみならず、彌陀佛なるものは、元は影も形もなきものなるを、御釋迦様が一時の方便の爲めに説いたる一夜造りの佛、謂はば御釋迦様の舌の先より顯はれたもの、夫れとば知らずに、本師の釋尊を忘れて、之れを拜ひのをば禮拜雜行などとは、何等の迷ひぢや、丁度天に輝く月を知らないで水に寫れる月影に夢中になつて居るのと同じ道理、佛法修行に志す信男信女は、能く此の理由を辨へねば、縱へ死にかわり生れかわり幾千萬年修行するとも其の甲斐なかるべきぞ」と種々に御經文を引き一々に主人を曉し、此の夜はこゝに一泊を致しました

### 千江子の信

不新

琴かさならず隙どめて  
暫しみ經を手をせばや  
惱みふる身のこのころを  
救ひたもふはうれよこれ  
赤地錦の表装に  
吾この指のふるゝとき  
佛の肉の心地して  
恐れのおこらずや  
紺紙金泥の卷々を  
くり返しつゝよみゆけば  
尊き聲のみちくして  
罪ある吾身おろろしや  
繰り返しつゝよみゆけば  
第十六の巻なるよ

無量の壽命茲に見へ  
眞の佛あらはれぬ

それよ吾等は狂者なるよ  
薬のよきと知らずして  
悶へある身となりしよな  
醫王のみ手にすがらばや

人のこの世の果敢なさを  
鷺の山よりながひれば  
よしや大火に焼れても  
茲處安穩の淨土とよ

毀れぬ盡ぬ世にありて  
それと信せぬ罪の身の  
諸天の天鼓さくとも  
悪業の眠りさめぬかな

慧光くまなく照すゆへ  
吾等の知慧もてらされて  
久しからじなみ佛の  
とむの壽命を身に得ひは

讀みつゝくれば其處此處に  
高き理想のはの見へて  
身は今下界にありとても  
はや靈山に詣でつゝ

下界の戀にあこがれて  
筆に紅さす此頃を  
み經手にどり讀みゆけば  
恥かしいかな吾思ひ

戀の道には悶へあり  
信の道には歡喜あり  
悶へによし身は死するとも  
再び歡喜に生さなばや

それよ歡喜に生きたらば  
戀しき人も誘はばや  
信の道には戀あるか  
佛は戀とどきますか

信の歡喜に入りたやな  
戀の悶へに入りたやな



十八年の今茲處に  
母に知らさぬ惱みあり

よし戀よりもいや高き  
信に此身をさしげばや  
誘ふ其人もしきかば  
ともに歡喜を分ればや

み經をどちて眼をどちて  
暫し靜に座し居れば  
五色の糸の世の中に  
吾身は終にまつはれて

若き乙女の血にみちて  
信に生れし愚かさよ  
うつくしき身に戀なくて  
此世からなる地獄かな

夜叉の私語さしどき  
惡業深しと觀じてさ  
戀の極樂望むより  
信の地獄に入らばやな

懸雲道人

津田雅樂助

秋葉純一

水野梅鳩

○  
掃磨路は松また松のみぞりかな  
松風の送る旅路や小六月  
梅が香や座頭も杖に手をいさめ

吐血集

露のまた舌たらの初音かな  
みじの夜のあまりを見たり今朝の夢  
茶摘女や説ふ手際の一はすみ  
夕日さす庭に奇麗な露のな  
涼車すきて里靜かなり露月  
たどり行小徑や淋し露月  
海棠に雨煙る夜や露月  
海棠に氣を配りけり露月  
浦人の舟の仕度や露月  
浪波津の舟の別や露月

芳山詠草

春雨や露の遠巻く千早城  
活動の萬人形や種夢畑  
如意輪堂にて  
ちる花に跳きけり吉野陵  
三奇亭に宿して  
雨しとく貼つる人の姿か南  
吉野山の櫻大かた散ければ  
幸に指もきられす櫻の葉

癸卯三月歸郷 松平 五峰  
到處有梅花 誰家求一宿 白頭歸故園 黃鳥移喬木

遊吉野山過金剛山麓  
金剛山上雨雲催 遊客帳惆望古臺  
青巖峻坂說崔嵬

吉野川宿三奇亭  
雲罩芳山雨濕苔 臨川樓上獨揚杯  
簑笠漁翁分柳來

欲登多武峰失道 鷲聲雄雉慰吾難  
侵雨分雲上古關 驚聲雄雉慰吾難

止筇願望所過山 漸至樵家知此地  
雨中愈道踏虬松 澗水淙淙煙霧濃

芳山昨見鬪蒼峰 同 舟 生  
四箇格言 南總 般

念佛無間 專修念佛教觀愆 渾如撰擇私書失

總指諸宗別法然 拈華微笑在心傳 可憐面壁天魔業

謗法罪中墮獄緣 且論二佛亂君臣 嗚呼亡國亡家教

深執決疑修開禪 未識鶴林遺誠懸 却見內心貪不厭

顯劣密勝誤謬因 祖判嚴然駭我人 律國賊 今街小乘多數戒



妙乘旅行感慨記 (承前)

影山懸雲

九  
巢林子近松門左衛門は、學者として又詞藻家としては、實に稀世の俊髦なり、而して彼れか物せる幾多の劇詩は、勸善懲惡てふ、單に一つの道德的品節の上に成れる作物としては固より見るべきものなきにあらず、然れども、更にヨリ大なる人生の歸趣を語る點に就ては、吾人は斷して彼れに左祖する能はざる也、彼れは念佛門徒にして彌陀の淨土に往生するを以て理想と爲す、隨て未來を觀つるに専らにして、現世の活世界に疎なり、一例と舉ぐれば、世上幾多の俗文學者に由て、舞文迎合、嘖々として稱嘆せらるる、彼れか傑作の一なる『天の網鳥』(所謂紙治)の主人公たる、小春治兵衛か情死の場を物して『縁くろも喉突くも死ぬるにおろかあるものかよしない事に氣をふれ最後の念を乱さずとも西へ〜』と行く月を如來と拜み目を放さず只西方を忘りやるな』といへるか如き、正に之れ彼れ自身か平生の安心を寫して以て、直ちに作中の人物に擬したるものにして、其『只西方を忘りやるな』と叫へる一聲は、實に平素西方彌陀の淨土を希求せるの結果ならすむばあらず、あ、何ぞ其安心の不合理的に築かれたることよ、吾人は、同じく之れ劇詩なりと雖も、竹田出雲に依て作られたる忠臣蔵と愛吟して措かざるもの也、實物の大石良雄氏もどより士道百代の鑑鑑にして、以下四十有餘人か義烈の大忠、苦心酸澀の結果、一朝、亡君の仇敵を討ち取て、其宿望を遂ぐるや、安詳として、自及もつて死に、れるか如き實に司馬遷の所謂『人莫不有一死、死或重於泰山、或輕於鴻毛、用之所趣異也』的の概あるものにして、又實に本化的死生觀の直寫と謂ふべき也、而して之れか寫實想の上に編まれたる『假名手本忠臣蔵』は愈々以て本化的劇詩と稱すべき也、田中



智學居士曾て曰く、

忠臣蔵の劇を見て泣くのは何だ、義士の忠節に同情するからである、劇に忠の詩美が充溢して居て、観客に忠の情美が存在して居て、之れが互ひに想美と詩美と相感して、忠の心性が一致するからである、想美若しくは詩美の一方が缺けて居ては、感應の妙機は成立しない、詩美に忠の特性を彰し得ても、観客に感應の無い時は、是また感しない、主殺して居るやつは忠臣蔵の劇を見て泣くまい、人に忠義の徳性が存在して居る限りは、劇の詩美に打たれる度の高ければ高ければ、多ければ多いほど、能く感じ能く泣くのである、  
眼の涙よりも心の涙で泣くのである、詩美に包まれた忠節と、人心に存して居る忠節との感應は、必ず詩美と想美の接觸より来るのである、忠節を以て居る人でも、詩美を感受し味得するだけの想美がなければ、或は感し方が少い、或は全く感しないかも知れない、性の忠は詩の忠と相一致し、想美は詩美と相一致した時、正しく人は詩中の忠臣となり、詩中の忠臣は人の性中に入り来て、二なく別なきものとなるから、此時こそは劇もなく舞臺もなく脚本もなく、役者もなく、我々一箇の忠臣と化して去つて、その深き忠誠を満足しその苦節堅操に感憤して、他人の事とも自己とも想ひ別つ餘地を有せざる境に在て、真情流露の感泣となるのである云々(本化攝折論一六三頁)

と、由來この劇に由て我が國民か忠の美德を涵養したること幾何をや、實に這の種の劇は、其か名詮自稱なる「忠臣蔵」の名と共に、我が國家社會の上下を通しての一大珍寶也とす、

十

およろ、物に觸れて情を起し、物を索めて情を托し、又物を叙して情を言ひ、以て旅趣を文硯の間に行るは、世間多才の文士か常なるへけれども、予の如きは素より不文、殊に、言の敢て其委曲と盡すに迫らざるは、徒らに閑文韻字の上のみ遊ぶことを好まざる個性の然らしむる處か、先哲貝原益軒曰えりあり「旅行して他郷に遊び、名勝の地、山水の麗しき佳境に臨めば、良心を引起し、鄙吝を洗ひ濯ぐ助となれば是も亦我が徳を進め、知を廣むるよすがなるべし」と、夫れ未見の異郷に入て信仰の志氣を鼓舞し、未知の事物に接觸して信仰の道念を涵養す、亦以て法華經の行者か旅行に就ての必須の用心ならずとせむや、之れ此の記の成れる所以也、(完)

歸納主義概念主義計りであります、私はそう思ひました、此では到底物にならないと思ひました、

○御覽遊ばせ、若氏の統一論より歸納主義と概念主義とを取り除きましたら、統一論の立場ががら／＼と破壊されて了ふので御座います、氏か説かる、時間的緣起論でも空間的實相論でも其歴史的教理發展の叙述は尠なからざる興味を與へますけれども、其結論は如何で御座いませう、是は原始佛教の涅槃觀の進歩發展したもので、涅槃といふ意義の概念さへ得れば千條萬條の教理の筋は違つても皆同一の真理に到達したのであるといふ結論です、氏は單平等觀と單差別觀を惡觀であると排しながら、自己をれ自身が既に此惡平等觀に陥られましたのでありますまいか、涅槃といふ抽象的概念的名を籍られまして、統一論の骨子とせられたのは氏が統一論の第一の欠點ではありませうまいか、

○此に對しまする一派の批評は氏の統一論は消極的退歩主義であるといふので、若今代に統一論をどくならば積極的でなくてはならぬ、進歩主義でなくてはならぬ、今の佛教を舊教理舊信條へ返らうといふのではいけない、むしろ空海の様に即事而真觀を出してわれに向て從來の佛教を統一するとか、天台の智者の様に一念三千觀を發表して、それに向て從來の佛教を統一するとかいふ、其通りに一つの新教理新信條を續釋したらは其こそ眞の統一論である、歸納的統一論はいけない、む

紅蓮白蓮

統一論壇の一小論文

(村上專精氏の佛教統一論第二編原理論を讀んで)

○村上專精氏は先に佛教統一論第一篇の大綱論を金港堂から出版されまして、大層其所屬宗派の物議を招かれましたので、氏自身も終に其所屬宗派を脱せざるを得ない境遇となつて、告白書を公にして脱せられました、

○斯の如き歴史を持ちました佛教統一論は、尤も銳意に熱心に氏をして其第二編の出版を忙かしたものでありますまいか、私は餘り早く第二編を手にしましたので、斯様な推斷も或は眞理ではなからうかと思ひます

○村上氏の統一論はいつ見ましても、恰度八百藏の芝居に於ける臺辭と同じことで、一本調子なのは全く厭が來ます、是は氏か統一論の根底には概念を得るといふ事と、歸納的論理を用いて居らるゝから、議論全株が抽象的に陥つたのです、此は最早第一篇の時の批評にも楠や吉田やろんな人々に依つて詳細論せられました事でありませうから、氏も今度は何か歩調の進んだ議論と吐露せらるゝかと思ひましたら、矢張前の

しる續釋的統一論なら成功するかも知れない、是を村上氏に望むといふ風に、明白に具體的統一論を要求し主張しました、  
○ううして村上氏は此論に向ひまして、一つも満足な答辨を與へて居られせん、私はむしろ疑ひました、

○然しながら私は今私の立場に立ち歸りまして見ますに、村上氏の歸納的消極的統一論も、或一派の續釋的積極的統一論も、私か理想する統一論とは全然趣を異にして居ります、氏等の統一論は歴史派の統一論研究派の統一論でありませう、私は全然此二つの統一論を否定しまするに躊躇致しません

○今私くしの立場にありませう統一論は歸納せらるべきものは總て歸納し、續釋せらるべきものは總てを續釋しつくした綜合主義の統一論であるのです、是は信念です、無論信念がわれに決定して居るのです、綜合主義は顯本主義の上に成立して居るのです、顯本主義は日蓮主義を生みましたので、私くしの立場にありませう統一論は歸納とか續釋とか舊教理とか新教理とかいふて歴史的に研究的に出來まする後天的の統一論とは違ひます、確に顯本主義が生みました先天的の統一論であります、氏等の統一論が歴史派研究派の統一論でありませうならば、私の統一論は信念派先天派の統一論であります、  
○果然村上氏はかの歴史派の統一意見に依りまして、今度第二篇の原理論に於て日蓮上人の宗教を批評せられまして極め



て杜撰な意見を公にせられた。私は思ふ、既に日蓮上人の宗教の見方が斯様である上は、定めし他の宗教に向ても杜撰な研究を遂げて其宗の専門家よりは或は案外な嘲笑を買つて居らるゝのではなからうかと思ひました。

○先づ一念三千を論ずるに當りまして、天台と日蓮とを比較しまして、天台は理想的である、日蓮は事實的であるといはれました、事實的といふ言詞が如何に俗な厭な言詞であるかは私は暫くいひますまい、先日蓮は一念三千觀を事行の題目に取直したといふのでありませう、如何に歴史派だつて餘り粗漏な見方ではないですか、今一層換言しますれば、日蓮は天台の應用にすぎないとの事でありませう、成程一寸見ますれば日蓮は事觀といふ事が口唱事行のみに限られてある様ではあるが、さりとて此上にまだ事觀の哲理的新光景かないといふ事が斷言出来ませうか、事の一念三千理の一念三千とは宗祖日蓮上人か屢繰り返されましたお言詞でありますが是が單に修行門の上のみの相違でなくて法体門の相違か明かにつゝまれてあるのです、然しそれならなせ日蓮上人は天台が説いた事已上に、即ち三千の事を説いた其已上に事の新内容を説かないのであるかとの詰責が起るかもしれぬ、其は第一述門の事觀を本門の事觀に開顯して丁へば、最早事として新たに説くべきものかない、三千をいへば法界萬法は皆収まるからである、然しながら事と見る立場が著しく異つた、述門

の事觀は理觀本位で無明緣起主義であつたが、本門の事觀は徹頭徹尾事觀本位で佛界緣起主義であります、一念三千論が宇宙實相論であるならば、それを理觀本位でゆくのど、事觀本位でゆくのどに向つて、哲理的相違を認めるのが至當ではありませうか、即ち天台と日蓮との教理の差異を認めるのが蓋し至當ではありませうか、然しなから村上氏はどうですか日蓮上人は一念三千を事實的に應用したものだとの斷案です、私ははかゝる杜撰な講義を大學でやられて其を聞いた頭で佛教を批評する學士か出来るのかと思へば、大町桂月氏かあんな宗教論を出すのも無理ない事であると思ひます、○氏は其次に於て日蓮の宗教は聖道門自力教の最後の發展であると論せられました、一体聖道門とは何を意味して居るのでせう、自力教とは何を意味して居るのでせう、勿論氏等が立場からいへば自力成佛主義か聖道門に與へる適當な言詞に相違ありませぬ、さう既にさうとすれば、氏は日蓮上人の宗教は單に自力教であると斷定されたのです、其のみならず氏は日蓮宗一轉せば淨土教とならざる可らずといふ議論を添へてありました、可笑いぢやありませんか、なせ日蓮宗が淨土教とならなければならぬんです、日蓮上人の教理に自他不二因果不二といふ教理が出来てあるのを知られないのでせうか、佛界緣起の立場から見ますれば、無論佛界の慈悲の力、智慧の力は、私くしどもは仰がなければならぬのです

此が佛の力です、他の力です果の力です、私しどもは主として修行の功徳を積んで上らうといふのです、此か自の力です、因の力です、即ち自他不二の上の自の力と、因果不二の上の因の力と、さうして同じ不二の上の他の力と、果の力とか、互ひによび、よびさまされて、修行法体の二門の全ふせらるゝのであります、此が聖道門自力教の最後の發展と見られましたる日蓮上人の宗教であります、然し此は自力教で御座いませうか、聖道門で御座いませうか、むしろ眞宗の純他力教よりも自力他力融通無礙の致か巧妙に出来て居りはしますまいか、此で淨土教に一轉しなければならぬ理由は何處に潜在して居りますか、村上氏の學問の聲價が余り世間に廣がらぬ様にしないと氏の不幸を招くかも知れませぬ、○本尊論に就ての批評もありませうが、此は次の號にでもかきませう、(不 断)

道德問題に就て

道 堂

人生の行路難哉、人生の行路難きにあらすして、易きにあり、人生の行路易哉、人生の行路易きにあらすして難きにあり、蓋し難易は其人の分別と覺悟にあり、されば古歌に

白波のあとなき方に行く船も  
風を便りの知邊なるらむ

要するに人生問題最後の斷案は、安心立命にあり、佛祖は誘ゆるに、資生順道と説き因果不二の方面より、生死不二の方面より顯本教の大妙法によりて、安心立命を宣示せられたり、願ふに罪惡の根元は、因果を撥無するにあり、頃日世の文星が、道義の壊敗を嘆き、これが救済策として、道德問題を擔き出して、罵々するは、悦ぶべきことなるが、心筋に便りなく思ふは人生と宗教の關係を認識せずして論議せるは、徒らに歸するの、譏りを免かれざる可し、演劇と宗教……文學と宗教……社會と演劇……此等關係の消息を傳へむには眞箇の趣味あるべし任他、演劇は其時代に伴ふ、人生の狀態を寫せるものとせば、吾人は在來の劇に於て、忠臣蔵先代萩は、確かに人生の光景を發展したるものと謂ふべけれ、政岡が女性に似もやらず、君を擁護せる苦心慘愴の所、千松が毒饅頭を食ふの所、八沙が千松を殺すの所、榮御前が連判狀を渡して敵に機密を洩すの所、四隣人なきを窺ひ、政岡が親子の情に迫るるの所、げに人生の隱微を映現せるにあらず哉、

爾かく、政岡が利義の名分を明かにせるをものしたる作者は武士道を標榜とせる乎吾人の想ふ所、先代萩の作者は佛教の因果説を骨子とせるはその本文に就て視れば明かなり、されどその一面には、當時の思想なりし武士道によれるも明



けし、而して武士なるものは、何處より來れる乎、これ日本建國の精神にして儒佛の渡來に連れて、發達したりしも、中古以降世の風潮に伴ふて理義を没却せり、白法隱没の箴言空しからず倫道横流せる秋に方たり、日本立國の精神を發揮するに努め、身命を迫害の下におき救世の福音を傳へたるは日蓮聖人なり、日蓮聖人の傳道三十年間迫害のために、寧日なかりしも、慈悲の本領によりて堅忍せられたるものを指して日蓮思想と稱すべし、

この日蓮思想は、佛祖の本懐たる顯本教の大妙法によりて生れたり、因果論も生死論も、人生論も顯本教の妙法によりて解決せらる可し

世の文星諸氏、西洋道德説によりて道德問題を斷定せむとするは迂回局まる愚論である

切に望まらるは、日本立國の精神と日蓮思想の實相を洞觀する爲に一トたび顯本の教義を研究せよ、否らざれば道德に就て根底ある論議は覺束なきこと也、

師弟の情誼

師恩を教へ智識の善惡を辨むは佛教特種の倫理にして以て社會の指標とするに足れり、近來師弟の情誼年を追て疎遠に流るゝの傾向あり、是れ豈に嘆ざるを得んや、直言すれば師弟の情誼を輕するものは全く佛弟子にあらず佛教徒にあらず、吾祖日蓮上人示して曰く「誠に佛に成る道は師に事するに過ぎず妙樂大師曰く若し弟子有て師の過を見若し實にも不實にも其心自ら法の勝利を遺せず云云文の意は若し弟子あつて師の過を顯さば若し實にも不實にもあれ已に其の心あるは身

此山に生ひ立ち、此山に出家の式と行ひ、此山に於て十五年間研究の結果たる佛教顯本論を唱導して而して此山より下りて鎌倉に向ひし也、宗風頓に吹き靡きて茲に六百五十一年教理論に於て、本尊論に於て、信仰論に於て、幾多の異流異安心か生じたとはいへ、かくまでに強大なる宗教的勢力を社會國家の上に呈したるは、此山に生ひたて三國無比の一大偉人の、建長五年四月廿八日に於ける曉の第一聲が一大根元となせるにあらずや、うれし清澄山は日蓮門徒にとりては終生忘る能はざる一大聖山也

而も翻て此山の現状を見れば如何、其所屬本山は依然として眞言宗にあらずや、其本尊は依然として虚空藏菩薩にあらずや、導善房の墓、朝日か森の祖師堂、血染の笹の葉、星の井戸、そは終に歴史的に記憶せらるゝに止まりて、毫も宗教的勢力を其處に認めざるに到つては吾人不敏と雖も三たび思を致さざる可けんや、然り清澄山は吾人の宗教の勢力範圍の一大根底を爲せるにも係らず却て他宗教の勢力範圍に入れり折伏、侵襲、改宗のあらゆる主義をとりて強制的に權力的に吾人の宗教を布演敷行せしにも係らず、此忘る能はざる一大聖山は其主義に依りても洗禮せられざりき、而して此結果として日蓮門徒の發達史には其開宗の根本地は今尙他宗所屬の寺院なる事を公言せざる能はざるの一大恨事を殘すに到れり、建長五年に一旦淨化せられたる一大聖山は、偉人を鎌倉に送りたる其日より終に再び穢れたり、一大聖山としての清澄山は終に歴史的に地理的に其名を記せらるるまでに穢れたり、吾人日蓮門徒たる者此現状に感奮して巨腕を振つて挽回

自ら法の勝利を遺失するものなり」此の御書判は尤も諸君の留意して實行せられん事を望まざるを得ず、并ば法の勝利は師弟の情誼を重するに依て獲得せられ佛道を成辦する事を得るなり、宗祖又曰く「天台の御釋に曰く雪山は鬼に依て傷を乞ふ天帝は誓を拜して師を爲す告嘆きを以て其の金を捨つる勿れと釋し玉へり何に卑しき身なりとも眞の法を知りたらん人を忽にする事あるべからず」此の判は其の師の何に欠點多くあるにせよ鬼畜等よりは勝るべければ眞法をだに心得たる師に對して赤心より尊敬を捧ぐべしとの教訓なり、又曰く御狀に曰く去る二日の始より御弟子となり歸伏仕り候上は自今已後人數ならず候へ共御弟子の一分と思召候は、恐悦に相存すべく候云云經文には在々諸佛土常與師生或若眞言法師獲得菩提道須是種學得見恒沙佛等或は云く初從此佛結緣還於此佛菩提成就云云此の經を案するに過去無量劫より已來師弟の契約ある歟又云く眞に無始無初の契約常與師共生の理ならば日蓮こんど成佛せんに貴邊登に相離れて惡趣に墮在すべけんや、(秋葉純一)

來者不拒

清澄山改宗問題と上總七里法華の新團結

新無名氏

安房に於ける清澄山は日蓮上人が立宗の根本地也、苟も建長五年四月廿八日を其腦裡に記する日蓮門徒にとりては終生忘るべからざる一大聖山也、然り世界宗教史上の一大炬火たる教理と信仰とはげに此山より流れ出でたる也、聖釋迦牟尼を除き聖天台を除き、聖傳教を除きて、三國無比の一大偉人の策を講ずるものなきが、吾人の宗教が發達史の出發點として此山を記述せざる可らざるまでに一旦淨化せられたる其古へに返す能はざるか、強制的權力的の折伏、侵襲、改宗のあらゆる主義は今の日蓮門徒の勇氣と熱心とをもつては唱導する能はざるか、然り彼等の勇氣と熱心とは清澄山の改宗問題を提供して其を實行するに確に手腕ありと信する也、

されど思へ安房の清澄山は地理的に尤も不便なる土地ならずや、今や日蓮門徒の多くが此不便なる地理上の清澄山に咄嗟し肉薄して其改宗問題の火の手を擧げんとするには餘りに不便なり、おゝそれよ、茲に上總七里法華三百有餘の寺院あり以て此局面展開の衝に當るべき、六百五十一年を過ぎて今尙日蓮門徒發達史の出發點の光榮を有せざる清澄山をして七里法華の徒が先鞭をつけて此局面展開の衝に當るとすれば、豈に無上の光榮ならずとせむや、

由來七里法華の靈域、三百有餘の寺院、三百有餘の僧徒、此を開きたる日泰の意氣と精神とを以て、宗風發展に努力せるもの幾許かある、日泰が土氣の城主酒井小太郎氏を感化して、強制的權力的改宗を取て遂行せしめたる其感化力は、今尙彼等の間に傳承して其信徒を感化するに何等の反響を及ぼさざるか、あらず、あらず、今や七里法華の徒は、宗教的傳道的には全く永き眠りに陥りたり、感化力の如きは存せざる處也、其宗教的傳道的に於て全く感化力の如きは毫も存せざる處也、是吾人が七里法華の徒の一大欠點として夙に悲む處也、

此永き眠りに陥りたる七里法華の徒は如今何をなして其宗



教的生命を維持しつゝありや、今や彼等の生命は殆んど作得米の爲につなげられたり、盆の祭と正月の年頭物の爲につなげられたり、即ち且家の供養の爲につなげられつゝあるにあらざるや、而して一方には虚榮に汲々として學位と高等寺院との纂誓に熱中して維日も足らざるの觀を呈せずや、然り、然れども、吾人をして彼等の惡徳を摘發するに餘りに熱心ならざらしめよ、此をいふは殆んど兄弟互に手を刺し足を斬るの悲觀を呈すれば也。

よし彼等とて經濟的勢力を外にして宗教的生活を送り得らるべきものにあらず、唯茲に彼等をして一たび大に反省の域に歸らしむべき必要は、經濟的勢力に伴ふ宗教的生活にあらざるは、宗教的生活に伴ふ經濟的勢力たる事を意識せしむる事是也、富に伴ふて宗教の發達盛榮あるにあらざるは宗教の發達盛榮に伴ふて富の勢力を來すならずや、然り若一たび此意義に立ちて寺院經濟に對する從來の觀察を一轉して、一に是を宗教的傳道的生活の資本となさば、彼等の富は如何に光榮ある結果をもたらさずや、咄彼の徒終に茲に氣附かずして傳道難を論ふべき身にありながら生活難を論ひつゝある也、あゝ吾人は終に呆然たらざるを得ざる也。

然しながら七里法華の徒、よし彼等眠りたらば終には覺めざる可らず、彼等如何に覺めざらんとしても七里法華の靈域に陰に陽にみち／＼たる日蓮主義の靈氣は終には早晚突發せずんばやまず、うれかあらぬか第二教區の人々によりて千葉に於て開設せられたる佛耶對抗の宗教運動は、近來千葉縣に於ける尤も著るしき現象としてむしろ七里法華の徒が永き眠

新たに團結せしめよ、清澄山而して七里法華あゝそれをして淨化せしむる前にそれをして團結せしめよ (完)

### 小倉氏の披瀝文を評して松本氏の辨明書を紹介す

冷眼熱眼生(投)

予は小倉豊三郎氏の「予が愚衷を披瀝して滿天下の同志に訴ふ」と云へるを讀みたり、小倉氏に於ては之が千古の憤慨記なるか知らざれども、予の眼に映じたる處に於ては唯々所謂頗るツキの愚痴こぼしに過ぎざる也、之に對して現れたるは松本郡太郎氏の辨明書也、予は彼の新聞事件に係る内部の關係は云ふを要せず、小倉氏の「泣て白す」の泣き方が衣裳に狂へる婦女の愚痴的泣き方なるに反し、兎に角松本氏がが信仰上眞摯の對度なるを喜ぶもの也、何は兎もあれ小倉君として左の如き批評は甘受すべきか、お互に小理屈を云ひ張れば幾らでもあるべし、唯自己の胸に双手を當てたる處、そこに眞價は存する也。

(一) 自己等の新聞事業の失敗あるより脇田 本多、田中の三氏に責任を問ふかの如きは禮を失せずや(若し問ふものあらば別に問ふべし)

(二) 單に發起者中薄志弱行の徒が顯本法華宗の側より出たりと斷言せしは自己の私憤を顯本側と云ふ數文字に被らしむるの觀あり、是れ信仰家を以て任する氏としては甚しき不徳義の言なり、顯本法華宗とは僧俗數十百萬の

りより漸く覺めたるを意味せずや、よし、時は來れり、七里法華の徒は新たは宗教的傳道的に團結せざる可らず、各教區に日れる地方的感情を一掃して互ひに區々の小我小見を打破して、七里法華てふ一種の意識たる大我大見に連結せざる可らず、かくして三百有餘の寺院を有する七里法華、三百有餘の僧徒を有する七里法華、更に數萬の信徒を有する七里法華が、新たに宗教的傳道的に團結して猛然として動く時、清澄山改宗問題を提供して此を日蓮門徒の一般に訴へ、長蛇一陣、東金、大網、本納より、一の宮、大原を経て、小湊、天津の要路に、傳道隊を布き、過激進取の青年派と温和中正の老僧派と互に縛となり經となりて、熱誠以て事に當らば改宗問題に對しての効果を奏せん事豈に至難ならずとせむや、

而も此結果は或は眞言宗との對論問答を惹起すべくも計られず、若果して斯の如き結果を惹起したりとすれば其眞言亡國論に於て、彼か鎮護國家論は我の立正安國論と對抗し、彼か大日三身論は我の釋迦三身論と對抗し、彼か即事而眞觀は我の事觀論と對抗して、佛敎論上有數の出來事たらん、而して其極統一問題の發展に波及する處あるとすれば、七里法華か新團結の名譽はいふまでもなく、引て對論史上に特筆せらるべき運命を有する可らずや。

六百五十一年をすぎ、今尙明白に淨化せられ洗禮を與へられざる一大聖山は、吾等が新たに覺めて新たに生れうべき七里法華新團結の勢力に待たざる可らず、あゝ清澄山をして長へに建長五年の古へに歸さしめよ、日蓮門徒發達史の出發點となさしめよ、而して七里法華の徒をして宗教的傳道的に

團體なり、發起者一二の人の行動迄の餘波をも受くべきものにあらざるなり(發起人を辭したる脇田氏及川合芳次郎氏等をも顯本側の人歟)

(三) 四海新聞とは小倉氏等の一私立事業に過ぎず、期成會の事業として起したるものに非ず、會には多少の補助を與ふる迄なり、又小倉氏に於ても成功する事を夢想する場合に於て、必ずや自己中心の私立事業たらしむべき熱心なかりしとは云へまじ、(不成功の結果を生ずるときは先に立ちしものも後に退き、又判然區劃のあるものも俗に云ふ幽靈にしたがるもの也)

(四) 「予は新聞の發行を速ならしめんが爲に印刷部の設備は既に之を經營し云云」は四海新聞社が成立したる時は古い活字と古い機械をソツクリ賣り附け否何等かの條件で譲り渡す積りなりしならん、然るに發企人を逃げ出されて定めて當てがハヅレたるなるべし、こゝに於てか愚痴をこぼすに非ざるや(まさかには四海新聞に寄附するのであつたとは云へまい)

(五) 元來淨乞食とも云ふべき坊主に金を出させんとせしは心得違ならずや(殊に、働に於ては比較的にあるが、うのかはり金銭には縁遠きは門本の坊さんなるに)

(六) 小倉氏の所謂「予が愚衷を披瀝して」は各派合同統一の事業を阻害するもの也、并は自然に相互に惡感を懐かしむるものなればなり、聖人ならぬ目下の人々をしては感情は最も大切なるものなり、氏は殊に内部の人なり其人の口より之を云ふ、人々の受けし惡感情はあらずと



云ふを得ざるべし、

(七) 彼の文に依つて見るに氏は一新聞事業と期成同盟會全体との輕重を忘れられたるが如し、同盟會を熱心に作りたるは自己の新聞事業を成就せしめんとの野心の他あらざりしならんか、眞に同盟會の趣旨を受するなれば臆腹するにあり、心で泣いて口や筆で泣かぬにあり、自分主義の爲には惡名も甘受すべし自殺もすべし、況や自分が該件の主任なれば何處迄も人をうらますして自己を悔むべし、是れ宗教家の本分也、但し彼の文が自殺なり懺悔なりと云はゞうれ迄なり)

(八) 新聞事件の失敗が多く自己にありと雖、之と他より指摘して批難する、をばさげんが爲に、己れ先づ之を發し人の機先を制するの策にして、其他人を抱き込めるありたり其心根察すべし

(九) 會計云々

右の如きは何人にも直に思ひ浮ばるゝ處、小倉氏の「泣て白す」は其涙の爲めに眼が余りに曇りたるを氣の毒に思ふものなり、尙ほ予が君に注告せんとするは、直に其個人を呼ばずして顯本法華宗の側云々の文字を挿入されし是なり、斯の如きは顯本法華宗の人々に惡感情を懷かしむるのみならず、日蓮宗の人々にも永く惡感情を抱かしむるものにして、嘗に統一問題のみならず其他將來に起るべき事件の爲に頗る不都合なり、然らば之を云ひし小倉氏の罪は宗門の爲決して輕からざるものと云ふべし、而已ならず前項にも掲げしが如く新聞事件失敗の爲には其他を顧ざる耶、抑一新聞事件は未なり

同志諸君の聰明なる判断を請ひ度と奉存候間茲に一書を啓し候

諸君も御承知の通り小生は昨年の宗徒大會の席上本化門下の各派統一を期し之が實行に着手せられんことを欲して右に關する決議案を緊急動議として提出せしに雲の如く集りたる愛宗護法の志厚き來衆は意外にも未聞不見(當時宗門内にて)の不肖の發議にも拘はらず滿場一致特に總起立を爲して右議案に敬意を表し賛成可決せられ爲めに意外の面目を施せしは勿論亦以て宗門の前途一大光明の發揮するものあるを認め末頼母敷一層感奮してひたすら其實行に關しては勿論宗門の改善發達乃至擴張に關しては微力を盡して外護の任務を全ふせんことを期し爾來小倉君を始め宗内の先輩と後進とを同はす有志の士と一面舊知の交誼を重ね宗門に關しては自他各派の差別なく細大の事總て之を耳にし之を口にするの榮譽を擔ふに至りたる仕合に御座候斯くて小倉君等の特に主唱せられし四海新聞發刊の舉も亦た小生に贊同を求めらるゝに至りたり

然るに素と小生の念願とする處は實に本化門下各派の合同統一にあり宗門の改善發達にあり又大に祖訓に基きたる廣宣流布にあり退て効かに思へらく機關新聞發刊の舉にして宗門の爲には營利的ならず私欲的ならず眞に愛宗護法の精神に由りて企畫せらるゝならん亦以て贊同すべし否な寧ろ進んで之を扶くべしと存候に付四海新聞創立に付き不肖をも顧みず願に應じて其組織に關する定款

統一問題は本なることを覺るべし

次に一言し置くべきは、予が此新聞事業の不成功に終るべきを豫め明言し置きし是なり、予は發起人としての奔走家の某氏等が、人を勸誘するに該業の頗る利益あることを喋々説明し居りしが故也、新聞事業を起すに先づ利益を説くが如き誤りも甚しきものなり、利益を説て集るものは我利強慾者にあらずんば、愚物ならん、而も新聞事業なるもの我利強慾者は愚物等の起すべき業務なるか、該業の不成功に終りし當然と云ふべし、(この理由は豫て發起人の二三に明言せし所なり)

予は小倉君を憎むものに非ず、同情者なり、されど一宗と指し呼で云々し、或は罪と諸先輩に歸せんとするが如きを惡で之に注意を喚起するものなり、猶之にも醒神する所なくば松本君ならず予は當の敵となるも敢て憾まざるべし、

小倉豊三郎君に呈し併せて同志諸君に訴ふ

宗門の一信士と稱せらるゝ小倉三郎君は本年四月廿八日發行日宗新報紙上廣告欄に於て宗門の事に關して悲壯なる句調を以て「予が愚衷を披瀝して天下の同志に訴ふ」と題したる文章を發表せられ之と一讀されたる諸士は如何の感想を懷かれ候哉小生は宗教の信者として殊に本化門下の徒としては猥りに人と争ひ人を非難する事をも好まず候得共右文章の記載項中小生の名譽と信用とに關する事多大なるもの有之候のみならず宗門の事業にも影響する處不尠と存候に付き聊か小倉君の反省を求め併せて

起案の任に膺り引て發起人中の常任委員にも推され之が爲め時間と努力と費用とを投したる事は普通の發起人と亦其趣を異に致候事に御座候然れども小生は本來新聞發刊の如き事業は門外漢に有之候處小倉君は其經驗を有せらるゝと承り及び候に付き徒らに名のみ常任委員の席末を汚して實權は小倉君に捧け深く君を信頼したり然るに而して創立費に要する發起人負担の出金の如きも異議なく應諾し余等は小倉君外一名の御方に所謂常務幹事の任務と常任委員會にて一任する事に決議して御任せ申候然れども宗門有志の喜捨同様の志を以て寄せられたる金錢若くは發起人の出金する創立費を發起人乃至常任委員たる牛等にも滲らすして之を濫費自由に出す事左は一任致さず候小生は小倉君等より金は入用なり如何にして金を事務所に集め得べきやに付きては數々御相談に預りしも常に不快の念を懷きたりしは他の儀にも候はず集りたる金は如何にして費消せしや何時集まりしや將又實際の支出は何程なるや創立に關し支出すべき豫算は何程なるやに付ては骨て協議を受けたる事無之候眞に事實の常任委員殊に主務幹事たり發起人たり主唱者たり主人公たる小倉君は他より集金されたる金錢の収支は申迄もなく徳義上小生等に時に報告せられ候べきは勿論收支の豫算決算に關しては形式的になりども圓滿に協議せられて金は入用なり出金せよと申され候て可然と奉存候費て小生は何にか好機會も候はゞ所謂愚衷の程をも披瀝して宗門公益の爲め又友誼上御注意申上度と存居候



處遺憾ながら微志總て空想と化し唯だ小生の不明を嘆ずるの外無之實に本年開宗紀念の當日には昨年の紀念大會以來徒らに御祭騒をなして一年間何事をも成さず安りに輕忽の舉措に出でたるの罪不淺を思ひ佛祖の御前に於て泣て奉謝居候折柄小倉君は泣て同志の不信を痛罵して滿天下の志士に訴られ小生は唯だ佛祖聖祖に對し良心の内には多罪を謝したるの差違は有之候得共等しく四月廿八日と云ふ日を宗門の紀念日として忘れざる丈は同一に御座候

如斯御互に泣言を開陳するに至りたるは結局御同様に本化門下たる信念信行の未だ積まざることに座する儀と存候斯て君と小生等の不徳は滿天下の信を引くに足らずして遂に泣言を陳列する悲運に至りたるは理の當然の事と懺悔して奮勵一番清淨の信念修養御互に肝要の儀と奉存候苟も宗門的事業計畫を主張する者は徒らに大言壯語して人を惑はしめ又同志を傷けず慎重にして篤實に且つ廉潔なる行動を爲して以て先づ同志者に安心を與へざるべからざるは勿論殊に事業の前途に付き確實なる成案を具して一厘一毛の出金も其事業の爲めに忠實に且つ生産的ならざるべからざる事と奉存候今日とても幸に要用の費途を説明會心せしめられ候は、何時にても出捐は厭ひ申さざる處に御座候君は小生の苦言を惡まず蕪辭を咎めずして心靜かに善意に聽納せられ小生として釋然として疑感不信の念を氷解せしめられ候は、獨り小生のみもの幸福には無之と奉存候小生と君との間には何等の恩怨も無

出身の僧侶中にて發起人たる諸師にして小生と感、を同ふして小倉君の満足に足るべき出金をなさざる方は有之候事と奉存候得共君の所謂「顯本の諸君は擧げて發起人を逃け出した」云々として「薄志弱行の徒」「盟約を破却して恬然たるの徒」「廉耻と知らざる」云々の惡文字の下に埋没さる如き事實は認めざる處に御座候餘りに事實を誣び過ぐるにあらざるなきや

(三) 各派分立の病因は感情の衝突に歸因する事を認め、て本化門下合同統一の實行と期待するものは勉めて彼我の感情を和らげ相接近せむ事を圖らざるべからざる筋合と愚考仕候況んや之を離間中傷する事の如きに至りては最も避けざるべからざるに於てをや然るに小倉君は顯本法華宗側に對し事實を誣ひて「薄志弱行の徒だ」「盟約を破却して恬然たるの徒だ」「廉耻を知らざるの徒だ」と呼ばれしは如何なる事由の候べきや今や各派合同の前に顯本法華宗と日蓮宗とは方に合同せん事を決し實行に近かんせざる狀況に有之候事を傳聞するの時に際し斯の如き言動に出でられ候は如何なる次第に候哉抑も亦兩者を離間中傷して其合同を破らんとするものなるか果して然らば此點に於てのみにては君は容易ならざる佛敵にあらずや

(四) 小倉君の所謂「苟も常任委員となりながら此始末だ」と罵られたる其松本郡大郎なる小生は一旦負擔したる債務は小倉君の意に叶ふ様に出金せざればとて爲めに消滅せざる事は夙に覺悟致し居候處にして假りに小生の疑感

之素と愛宗家として且つ信友として談笑を交へ宗門事業の御相談を致すに至りたる間柄なれば何處迄も精神的の行動は御互に切望すべき儀と存候去れば開書を以て君等に對する不滿を茲に開陳する事は實に欲せざる處に御座候得共如何せむ君の文章中に「發起者中の薄志弱行の徒だ、盟約を破却して恬然たるの徒だ、廉耻を知らざるの徒だ、予は斯の如き人々の多くは顯本法華宗の側より出でたるを悲しむのだ、顯本派にて眞ッ先に躍り出したるは關田養叔君と松本郡大郎であつた、然るに發起人會に於て創立費及び持株の議決するや顯本の諸君は擧げて發起人と逃げ出した僅かに踏み止つた松本君の如きも言を左右に托し今以て出金とせぬのである同君は苟も常任委員となりながら此の始末だ」云々と表白せられ候に至りては先づ其妄を辨し小生の名譽毀損に對する正當防衛の方法として又或意味に於ては公益の爲めに一言茲に及ばざるを得ざるに至りたるは實に残念至極に御座候

以要言之右に對して辨妄の要旨左の通りに御座候  
 (一) 小生の眼中本化門下派別を認めず候從て小生は顯本法華宗のものにも日蓮宗の信者にも無之候又從て曰く何派曰く何宗曰く何會とて異體同心の御聖訓に背反したる宗派の信者にも僧侶にも無之候一に、聖祖御建立の宗門に歸依し奉たる信者に御座候得共小生か生家の菩提寺顯本法華宗所屬なるの故と以て君の所謂「顯本法華宗側」と稱せられ候ものならば夫迄「御座候」  
 (二) 村上宏玄僧正の如き關田養叔師等の如き顯本法華宗

の通り小倉君等の經費支辨の方法其の宜しきを得ざるものあるにもせよ發起人としては連帶の責任を負ふて發起人以外の善男善女に之を謝し己に四海新聞株式會社創立事務所へ交附の金員にして返戻すべきものは之を返戻するの責任を全ふする決心に有之候此儀は申迄も無之候得共特に申添置候故に小生は相當と認むる時は僅かに廿金のみならず其以上と雖も敢て辭せざる處に御座候誤解されては甚だ迷惑の至りに御座候

(五) 末段に至りて小倉君は期成同盟會に論及して「新聞事業が右の如き有様なれば同盟會は丸で振はない振はないのも其筈である幹部には人がない」云々餘りに事の本末を顛倒し兼ねて他人を侮辱されたる哉に被存候仍て同盟會の爲めにも一言辨し置き可申候  
 一、同盟會としては他日四海新聞株式會社設立の節發刊さるべき四海新聞を以て宗門機關新聞たるべき事を信じて可成的援助すべき事に決議されたるに過ぎざる事  
 一、四海新聞なるものは四海新聞株式會社たる一商事會社より發刊されべきものにして四海新聞株式會社の創立は直ちに同盟會の事業にもあらざる事  
 一、從て四海新聞の發刊は同盟會の主たる唯一の事業にあらずして同盟會の事業は昨年の大會に決議されたる重大問題中第一に各派合同統一の實行を期する事を眼目とし其他序を追ふて幾多重要問題の遂行を圖るものなる事は小倉君は勿論滿天下の諸君錯誤なく御承知置を



乞ふ且つ之は同盟會の決議録にも明瞭なる事にして當時評決に列したる諸子は正に之を記憶せらるならんと奉存候

一、「同盟會の幹部には人がなす」とは何事に候哉先輩と後進とを問はず僧俗の差別なく宗門内の知名有爲の士を網羅して評議員若くは幹事の任に推舉しあり之としも幹部に人なしと申され候哉殊に不日第二の宗徒大會は大阪に開會せらるべき今日に於て如斯安言と表白して他を感はしめ引ひて期成同盟會の氣勢にも影響を來す事尠からず候少しく慎重熟思の程こゝ願はしく奉存候

終に臨むで四海新聞發起人諸君にも御相談申度は至急發起人會を開き從來の経過報告を小倉君より受け此先は如何にすべきやを審議決定して發起人たる責任を全ふし度と奉存候併て小倉君等の責任上先づ小生等の疑念を解き安心を與へられん事を望み發起人の責任として眞面目に協議を遂げ以て成功の見込も無之候はば應募の同志に向つて自分等の不明不徳を謝し既納の金員は之を返戻しては如何將亦成功の見込あらば大に成す事に致し度と奉存候又滿天同志の諸君に對して望む處は單に前段申置候通り同盟會に對する誤想なくして同會の事業の最大眼目にして第一着の事業に属する合同統一の實行を僧俗の別なく異体同心の奮闘に基きて企圖せられ以て其方法に付き良策名案も候はば宗政の當局者を始め同會にも申出られ同會の幹部は各派の機關に向て交渉し融和解決せんと

を圖るべき儀と奉存候  
明治三十六年五月一日日宗新報革新第二百七十二輯と  
讀みて

恐々謹言  
松本郡太郎

統一團報

○顯本法華宗々會 全宗にては宗制の規定に依り本月一日より全十日まで定期宗期を全宗々務廳内に開會し宗制改正案卅七年已降總豫算大學林建設法案等を議決せられたり

○大學林の新建設 顯本法華宗に於ては大學林建設の議ありて先に今の管長事務取扱たる本多日生師が事務取扱たる時より銳意此事に熱心せられしが、とかく時機の到らざる故か今日まで其建設に着手する能はざりしが今回開會せる宗會に於て右大學林建設の案を決議したり其地は東京府下雜司が谷本染寺の境内に數千坪の畑地あるを割きて茲に講堂、寄宿舎、圖書館、教職堂、布教所等を建設する由にて尠くとも向ふ三年間には完成せらるべしといふ喜ぶべき事にころ

○評議員の改撰 評議員満期に依り今回の定期宗會に於て其全部を改撰し錦職日航今成乾隨鈴木暉學橫澤日渠征川真應の五師當撰せられたりと

地方通信

●千葉縣下教界の近況 佛耶兩教の衝突ありし已來、人心の傾向は一時教界に傾注し兩教の對論所決を見聞せんとの好奇心は縣下人士の腦裡に湧起し種々の方面より鼓吹し來り、

論を好まざる儀と存じ當方にては準備致さず夫れ故御申越の儀は謝絶仕候  
敬具  
四月十六日  
日瑞同盟キリスト教千葉協會

本 團 寺 様 御 中  
本 敬 寺 様

殊に地方の東海新聞は評破的鼓吹策を取れる等仲々の人氣となり、日宗側には地方有力の信徒、桂田、古川、高橋の三氏及び本團、本敬、兩寺の檀信徒最も熱心に外護の本領と盡され、その當事者たる川崎守信、吉野了孝、竹内無着、長谷川日濟、廣部永真の諸師は殆んど寢食を忘れて内外に盡され、今回全町に組織せられたる立正安國會は全師等の盡力にて非常の盛況を呈する由、加ふるに地方有名の愛國家たる、飯豐利一氏の一家、川上規矩氏一家の後援ありて、一層の聲援を添へ、其他東亞佛教會員の祝辭、山根僧都の祝電、協田僧止の「日蓮聖人の勤王論」と顯せる施本數十部を寄贈せられて同會を獎勵せられたる等最も同會の發達と助けられたり、その後基督教徒も道路布教に英語教授に種々の手段を施して自衛策を講せり、頃は四月中旬となりたるより、日宗側にては先きに基督教會が四月中旬なれば、問答對決も致すべしとの返信なる故、定めて申込もあるべしとて歎待せしも何等の申込もなく早や十五日に及ぶも普沙法なきより、既に邪教國賊の斷定と下したるも、百尺の竿頭更に一步を進め、彼に勇氣あらば幾回なりとも對論を欲すとて左記の請求狀を送れり

拜啓過般中佛耶兩教の正邪論辨申度御願會に及び候處四月中旬頃千葉町に相當資格ある者の立會の上御辨致度の趣、候最早其時機に際し候問否や此者へ御回答被下度候様待入候、早々敬具

四月十五日

本 團 寺 守  
本 敬 寺 守

基督教會御中

右に對し左の返書を送り來れり

拜復御申込の儀に付きては其當時當方より申上候通り相當の謝辭も無之加之當方より御請求申候儀に付き何等の御回答も無之故最早當方に於ては對

右の回答を見るに假令準備せざるにもせよ、眞實對論の護法心あらば當方の論求狀に依り双方にて準備するも差支なし、要するに敗北運軍の防禦策なるのみ、胸中一點の護法心なきを覺知し最早最終の宣告と興ふるの勝なるを了知し四月十八日正午より大塚無偏師が卒る道路布教隊は夜に徹して修行し點燈の頃には先きを争ふて寄せ來る傍聴者、多くは學生、官吏にして辨士の出席を催すの拍手は堂内に響き、立正安國會と大書せる高張提灯は門前に輝きて生死長夜を照らせり、吉野場主の準備周到、川島師が内外の注意精密の間に、古川居士の開會の辭、石川師の「木佛畫像に就て」廣部師の「敢而縣下の同胞に望む」との題下に縣下の靈蹟を數へ來り、宗祖降臨地を讚歎して縣下先哲の偉人を擧げ忠と孝との定義論より進んで、現今散漫せる雜多の宗教を攝獲和合の大責任は、縣下同胞の重大責任と論斷し佛耶對論の公約し能ざるを痛哭し喝采聲裡に降壇するや、竹内師の「眞如論」終りて清水師の「佛耶兩教の大異同」の宿題に各宗教の教義を一掃して眞偽を辯明し、基督教を或一笑に附して宣教師等がその聖書の捉をも守る能ざる無骨漢と叱責し、無量義經より進んで本門書量品の極説に入り三種の世間を詳論して十界事常住の妙義を説示せられ、我等與衆生の御文を引かれて、自己主義の天國昇進の空想を破し西方往生の假設を打破し、本尊抄の佛起大慈



悲の遺文より立正安國論に入り、毎自作是念の大慈悲願に結要せられたり、此間三時間餘の長談に亘るも聴衆更に倦厭の状なく無宗教を以て得意然たる輩も一場の轉法輪に隨喜の涙を垂れ、全師の碩學高德を敬慕すると同時に大に菩提心を喚起せり、今回と數へ全師の演説三席なるが全師の有識者は始めて眞佛教の價值を了得し爾來渴仰の聲に傳ると謂ふ、全夜の演説を筆記したる醫學生三名實に感謝の至り、傳へ聞く氏等は學蹟優等品行衆に擢で自然學生の摸範たる傾勢ありと聞く氏等幸ひに健全なれ、その翌十九日は曾我町に開延し正午よりは、大塚加藤の両師及び前夜の醫學生一名と清水師に依りて捨邪歸正せられし石上超然氏も加り、『石上氏は號を敬度と呼び歸入前には盛んに日蓮宗非佛教論を主張したる人なり』と道路布教を行ひ、晝夜二回の演説を開き古川、石上、石川、廣部、竹内、長谷川、清水の諸辨士交代に廣長舌を振はれ曾我町に前代未聞の教筵を開き同座無間論を主張して自己の非を防ぎ居る鼠衣圓頭の肝膽を寒からしめたり、本會は高橋實吉氏の準備周到に加ふるに全氏が設備せられし未法流布、立正安國會の高張提灯は光明赫として無明の闇を照せり、の翌二十日は八幡町に開筵し同じく加藤、大塚、石上の諸氏にて道路布教を行ひ午後六時より同所普通學館に於て盛大なる教筵を開きしが全所は市原郡有益の地にして傍聴者も多く、さすがに廣き學館も立錫の餘地なく館の表門には、立正安國會の高張を點燈し、點燈の頃より加藤、山縣の兩師は提灯片手に町の要處に布教して教益と與へ、聴衆場に充つより諸辨士を排して、石上超然氏が『宗教の撰擇に付て』の題下

に各宗を説破し天理教會の實檢誌を繰述せられて聴衆の感と解き、次に廣部師の『佛耶兩教の對論初末』の題下に顛末と報告し、東海新報紙上の談見を矯し、曾て師が辨駁書を全紙上に連載したる理由を詳論して、敎家の天職と明示せり、次に清水師の『日蓮聖人の日本觀』の題下に今日佛教の不振は權門諸宗の徒が招くところなりとて、その理由を詳述し、日本帝國の汚面を釅すと論斷し、次に漢學者流が自讃毀他の狹隘心より、頼山陽が外史及び政記を著述して、勤王論を主唱すると同時に、漢學の擴張主義を取り、佛教排斥の毀他心に於て、前二者が眞佛教の價值を隱蔽したる大罪人なりと論定せられ、これより審量品の極説に進み立正安國論より宗祖の日本觀に論及し三妙合論の法談より、眞の靈山事の寂光論に至りて、假設の淨土空想の天國論は自然廢滅に歸し、謂已均佛の邪見、法身理体の有説庸佛論等は全く眞佛教の眞義を知らざる迷徒なりと破し此等の諸宗は日出で、後の星の如しと結論し、正法國に流布せざれば國土安泰ならずとの、日蓮聖人日本觀に結要示説せられたり、全夜の聴衆は重に官吏、政治家、敎員の類なりしが、夢さめて後の心地せる者一同隨喜の涙に咽せびたり、全夜の演説に尤も便宜を與へられたるは全町の萩原昇吉、川上規矩、藤崎湖南の諸士にして齊藤淺吉氏の如きは忙中をも厭み連日盡心せられたり、その翌日一樓の奇報に接し一同車を運ねて千葉町に至り、聞くところによれば法華の坊さんが大威張りに耶教退治を行ふたこのことが基督教徒が今日に行ひしとの訛傳誤聞にして、失望の極、一同は本圓寺に引き上げ結願式を佛前に修し勞を謝して散會せ

り、頃は卯月の空、陰雨微々として、山眠るが如し、袂を引くが如き縣下の護法家、別れを惜むが如き清水師の脚足、由井ヶ濱ならぬ、總洲の千葉町、伊東が島ならぬ、雙椀の法林再會を期して分袂す、(千葉縣一生活)

因に記す、去月二十六日のことなるが上總姊ヶ崎町に天主教徒ありて、廣部師の出張ありたるも例の如く對論所決に至らず地方には有識なる高石氏等に會し大に法鼓を鳴し今後公會演説を連月開會する手筈なりと謂ふ、

候此地は權門他派の多數を占有して布教の實跡さらによく唯此の寺に在りて宗教福音を傳ふるあるのみ今後此の地に於て布教宣傳に怠るなくば宗風の前途大に見るべきもの有之事と信し申候

統一編輯員諸公 作州だより

春風花上を吹き去て、世は一面の若葉と相成申候、人は復た、是より漸く熱埃中に捕はれの身とならざる可からず候、公等御自愛專一に奉祈候、

却説、過般來の敎信一東に申上候はむか、當國勝田郡高野村大字押入は、津山町を距ること僅々東二十丁ばかりの處にて候が、同地は由來淨土宗の信徒多數を占め、本宗の信徒は少か二三名に過ぎず候も、妹尾平次郎氏獨力、大に法益を潤さむと決心し、去る三月二十二日午後一時より、開演すべく準備を整へて、われ等に出張すべく促されしかば、

●全別信 上總田越妙國寺は數年已前より保存會なるものを設立し斯會の事業として敎田の開拓に従事致居候ひしが去月八日は釋尊降誕の聖日なるを以て數名の僧侶を招待して大法會を行ひ申候此席終て東京より歸省したる三上義徹氏は肉の飢と心の饑饉との題下に宗教信仰なきものは精神上の食糧に餓へたる哀れなるものとの前提を措きて凡ての人類は此慈悲深き佛陀の聖きパンを食ふて始めて精神生活を圓滿に遂ぐる事と得べきものなりとの論旨を尤も熱誠の語調をもて容易に説き明され申候次に金阪師は人類の生活界に宗教の必須なる所以を説きて本宗教徒の安心論を詳密に述べられ申候此の日參聽せられたるものみな大法福音の琴線に觸れて更に信仰の熱を高めたるもの多數なるを相認め申候而してまた五月十日太田子爵家の追善法會を營み式終て横山會章師は多數の病的状態を擧げ來りて瀆祠迷信の弊毒を喝破し本化の本尊に歸命するを以て純潔なる正しき信仰なりと論定し統一的大本尊の本義を明かにして眞實なる信仰と換ひ起され申候參聽者は皆無量の感化に接し確實なる信念を固められたる事に有之

開會の趣意 林 日 法  
 社會上に於ける宗教の活力 影山 謙二  
 信念と目的とを確立すべし 原田 容廣

と、各自起下に演説致候、聴衆は、同所全員殆ど漏るゝ者なく仲々盛會にて有之候ひし、殊に同村々長岸本種次郎氏は、もと政治家にて縣會議員たりし事ある杯すこぶる時代智識に通せらるゝ由かねて聞きしが、當日開會時刻前より來會せられ、熱心の態度を以て聴聞せられたるのみならず、演了後にも、數番の質問、種々の談話等ありたれば、爲に場裡一般の聴者にも一段と盛り宜かりしかに相覺へ申候、

『日蓮か慈悲廣大なれば南無妙法蓮華經は末法萬年の外未來までも流布すべし』とは、聖祖の斷々たる御確心と、偉大



なる御慈悲心との御聲などは、かね／＼拜し奉れる處なるがこゝに、勝田郡豊並村大字馬桑（津山を距る東六里）延原嘉太郎は、今を去ること十年前に東京へ登られし由なるが、在京中、圖らず日宗の教化に菩提心を啓くに至り、爾來非常に強盛なる信仰を發揮し、此度久々ぶりにて帰省せられたるを幸ひに、其一家の父兄は勿論、一門同族郷黨の人々に對して、從來の眞言宗を廢して本宗に歸依すべく勸告し、且つ同地舊來の我が信徒櫻井定太郎氏及び其比隣なる『横山信徒』の團躰中へ謀りたる結果、我等に布教請益を求められしかばわれ／＼は直に之に應ずることし、先づ途序の便宜に従ひ横山にて一席の布教を爲し、夫れより右の馬桑へ進むべく、順序ど日取りとを豫定して廻教に取り掛り申候。

『横山』信徒とは、勝田郡豊田村（津山を距る東五里）を中心として、其邊周廻一帶の地方に於て昨年眞言宗より改宗したる新婦依の一團にて候が、豫定の如く四月十四日午後六時より松原喜市氏の宅にて、

石川見覺  
林日法  
影山謙二  
須らく剣を提て起し可し

時機の手心  
須らく剣を提て起し可し  
法華經の例  
順序に演述致候、此地も亦非常の盛況にて、法益最も揚りたる模様に見受申候、因に云ふ、同地は盛信氣鋭の信士を以て充たされたること、續々改宗歸來する者ありて歲月と共に盛況に向ひ、予か昨年八月始めて布教したる時とは信徒みな孰れも別人なるかの感さへ有之候、將來實に有望なる處に御坐候、されは何れ遠からず教會所の新設を見るに至るな

らむと存候。

其翌十五日、石川見覺師を除くの外、我々の一行は、かの横山なる信徒、須一氏一族及び森藤竹松、森安孫四郎、松原喜一、岡田時治氏其他数名の人々と俱に馬桑へ向て進發し、同日午後六時より、櫻井定太郎氏の宅に於て、

須一甚平  
影山謙二  
林日法  
原田容廣

日本國之法華經  
一心強盛  
信仰の實義

と、各自滿腔の熱血を披瀝して、破邪顯正的に繰述仕候、聽衆は素より豫て延原氏等に由て、改宗を勸告せられつゝある矢前きなれば、一層熱心の度を用て開法致候、うれかあらぬか、即坐に改宗を申出たる人々有之し程にて充分法雨の潤ひ渡たること、被存候

其翌十六日は、勝田郡東部の一都會なる眞加部（津山を距る東五里）と申す處に廻演すへき日程に相成申候、これより前き石川師は、横山より同地へ向け準備の爲に先發せられ、川上雄四郎、安藤金一郎、安藤來治、小林常治郎、豊田久三郎氏等と布教方法協定の結果、同氏等會主と成て、同所は勿論其比隣近村の重立たる人々を夫々案内状を發して、準備全く整頓の上、今や晩しと待ち受けらるゝ處、予等の一行か巡到したれば、乃ち直に午後六時より石小林氏の宅に於て

安藤金一郎  
石川見覺  
林日法  
影山謙二

佛敎統一論

原田容廣

と、須次演了致候、尤も當夜は、恰も開會時刻前より、春雨細々として糸を垂れしも、何分所柄ら丈けに多數の聽衆ありて、なか／＼の盛會にて有之候ひし、尙又小生は、其翌日、特に安藤金一郎と相抱て清談に一日を暮し申候、氏は法律學校の出身なれども、彼の極端なる法律萬能主義を唱道する一派の修羅的學者流とは、頗る撰を胞にする處あり、深く意見を社會教育の上に注ぎ、其日常修養の點に於ても、近比ろ佛敎の教理を發揮して、社會上の活動線に施用すへき志と起されたる杯、其用意功夫、實に俗中に一頭地を抜けるものか謂つ可きに候、予は頗る氏の所懐に會心する處あるものから、將來互に理想の友としし世に立たむことを約して、盡さぬ語らひの數す／＼を他日に譲りて袂と分ち申候、

近來我地方の教信ざつとあらまじ如斯に御坐候早々敬具……（五月八日影山懸雲）

●金澤通信 拜啓御團各位倍々御健全奉大賀候

借當地の教界はいつも寂として聲なく各宗と通じて宛然死せる如くに御座候此頃は村上專精氏の佛敎演説御座候へどもさつぱり火の手上がり徒に新聞の冷評を買ひしに過ぎず候

我が華祖門下各教團は通じて眠り未だ覺めず五十の日宗寺院四拾の僧侶御座候へども病已に骨に入れる彼等俗僧は遂に度し難き不治病的賣宗奴に御座候故に日蓮魂も折伏の氣骨も護法の血も皆既に／＼盡きて唯四肢五管を動せる法衣を着せる偶像に過ぎ不申候

されば物腐爛すれば惡臭甚敷習にて金澤聖祖門下の教光日々

に衰滅に歸するに反し門下の寺院至る處別勸請難觀請の惡弊の盛んなるは實に驚く可きに御座候されば寺院の維持法は全く邪命に依てせられざるは無き有様に御座候

我宗本行寺にも從來無緣塔に對し種々に誤傳して迷信せるもの有之亦縣下能美郡本成寺にても海上安全の爲とて龍王權現と稱し信仰を拂ふもの少からず候ひしも今回本成寺には三田村義俊師本行寺には紀野俊耀師任命住職せられしより直に兩者其れが除去を斷行せられしは實に芽出度事に御座候亦兩寺に於て數々演説會に説教に法幢高く正義の顯揚を計られ候又一面當地北國新聞は大に迷信打破の盛業を費して紙上に掲載し各教團寺院が爲せる雜亂の勸請法は没意義背祖の行動なるを論斷せしより單稱日蓮宗にては大恐怖を來し北國新聞紙上に左の如き特別廣告と見るに至り申候

去月廿六日發兌北國新聞紙上雜報ニ日蓮宗ト迷信ト顯シ妄誕極ル文字ナ列チタルハ一突ニ附ヘルニ足ラズ宗名異ナレバ敎理モ亦別ナルハ諸彦ノ知ル所也

巴レテ讀シ他ヲ毀傷スルハ彼宗ノ特色也更ニ怪シムニ足ラズ若シ日蓮宗ノ信徒ニシテ彼ノ記中ニ對シ不審ノ方ハ御來尋相成度此段注意ノ爲註ニ廣告ス

石川縣日蓮宗總所

彼れは吾宗の本尊統一論に對し妄誕也とし一笑に附するに足らずと公言して辱ぢざるに於ては實に其厚顔なると圖々敷に呆れ果て申候而して又日蓮宗の信徒にして彼の記事に對し疑問を懐く者あらば云云として保守的態度と取り多く信徒を誤摩化さんとするに至ては實に惡みて尙あまりある無道心の輩に御座候

本月三日には本宗本行寺新任住職紀野俊耀師の晋山式を擧げられ候は盛會に御座候又同日正午より同寺に於て本宗實義



大演説を開會せられ各辨士熱心に本宗の正義を主張し大に法鼓を撃て門下本尊の雜れを折伏寸断せられしは眞に壯快にて御座候同日演題は

- 開會の辭.....三田村 義俊師
- 佛の候補者.....大橋嘉久二
- 妙法のの徳.....倉上 章 榮
- 日蓮上人の性格.....小澤 盛 重
- 立宗の大本.....紀 野 俊 耀
- 宗家の要領.....成 島 隆 康
- 正信と迷情.....三田村 義 俊

斯くして閉會を告げしは午後五時にして聽衆堂に滿ち殊に即座に捨邪歸正して從來の迷信を悔改めし者さへありて實に大盛會に御座候

●作州の新開教 本多管長現下に隨行せりし本團の松尾忍水氏は、四月二十日郷里美作久世町に歸り、同地日蓮宗興善寺住職淺沼惠海師と商議し、同日午後七時より、佛教正義の大鼓吹を爲せしと云ふ

開會の辭.....淺沼 惠 海師  
郷里に愛別して人生最要の大義を談す.....松尾 英 四 郎 君

顯本之光

須らく靈に於て大に富むべし

大に豊なるべし

本成院 說教

我等か教主釋迦牟尼世尊、法華經方便品に説て曰く、我佛眼を以て六道の衆生を觀見するに貧窮にして福惠なし、と、これ我等か肉体の上の貧窮なるを言ふにあらざして、我等の靈が即ち精神上の福徳なく貧窮飢渴したるを指して言ふたのである、我等は肉体に於てこり、彼は富んで居る我は貧くある彼は貴人である我は賤くある等と差別はあれども、精神上に於て何等の快樂も無く何等の愚癡することなきは、彼の貴族彼の富豪も、我等貧賤の者と何の異なる處もないのである、我等人間社會は靈に於て實に貧窮である、實に飢て居る、我等か靈の飢たることは、彼の東北地方の飢饉の夫よりもより多く飢へて居るのである、我等か靈の飢たることは一歳二歳ならず、無始曠劫より未だ曾て渝らざる飢である、我等は無始已來此飢を凌かかんが爲め貧窮なるを免かれんか爲めに展轉

寄贈新刊雜誌

和 友 雜誌	第七卷第四號	麻 布 其
教 友 雜誌	第四一八、四一九號	甲 斐 其
十 善 寶 窟	第一五七號	小 石 川 目 白 僧 團
日 本 之 柱	第一一八號	大 阪 立 正 社
妙 好 華	第三卷第四號	芝 田 沾 蓮 社
東 亞 の 光	第四號	神 戶 命 身 庫
佛 教 宗	第六卷第五號	阿 波 師 子 王 文 庫
佛 教 教 育	第三十九號	高 橋 佛 教 大 學
北 友 雜 誌	第八十五號	高 橋 佛 教 大 學
新 世 界 新 聞	第一七八號	池 上 佛 教 大 學
慈 善 時 報	第六號	芝 田 佛 教 大 學
日 宗 新 報	第二七二、二七三、	芝 田 佛 教 大 學
智 識 新 報	第二十九號	芝 田 佛 教 大 學
大 條 學 報	第十九號	芝 田 佛 教 大 學
佛 教 文 藝	第一卷第四號	芝 田 佛 教 大 學
拈 華 錄	第三、四號	芝 田 佛 教 大 學
同 志 の 友	第六號	芝 田 佛 教 大 學
精 神 界	第三卷第四號第五號	芝 田 佛 教 大 學
四 明 餘 霞	第一八四號	芝 田 佛 教 大 學
師 子 吼 新 報	第十三號	芝 田 佛 教 大 學
道 交 會 報	第二號	芝 田 佛 教 大 學
樞 交 會 報	第一七八號	芝 田 佛 教 大 學
大 道 叢 誌	第一四〇號	芝 田 佛 教 大 學
法 苑 珠 林	第二十一號	芝 田 佛 教 大 學
國 風 法 苑	第十六年第五號	芝 田 佛 教 大 學
政 教 時 報	第一〇一號	芝 田 佛 教 大 學
三 世 紀 農 報	第四卷第二號	芝 田 佛 教 大 學
加 持 世 報	第三卷第五號	芝 田 佛 教 大 學
東 洋 哲 學	第十編第五號	芝 田 佛 教 大 學
博 愛 報	第十三號	芝 田 佛 教 大 學
	第一百五號	芝 田 佛 教 大 學

煩悶しつゝあるのである。然れども我等か愚痴の無明は我等の靈を導きて益々深抗に陥らしめ我等をして永劫に六道の流轉を免れしめぬのである、我等は如是にして無始已來貧と飢とに迫せられつゝ生死海に漂泊し、今尙大に苦悶しつゝあるのである、佛陀如是の衆生を觀見して大慈悲を起し爲めに法を説き給ふ、佛陀大慈の法は我等貧しき衆生をして大に富ましめ大に豊かならしめんか爲めである、我等の靈の飢渴を急やし永劫流轉の苦患を救はん爲の大福音である、靈に於て飢たる貧しき一切衆生は速に來つて佛陀の慈光に浴し大に富し大に豊かなるべきである、我等一切衆生の心は無始已來貧愛無明の深く、佛陀大悲の光明と運り、執權軌迹の荆刺漸く蔓延し、永劫菩提の善苗にして生長せしめさらしむ、今や佛陀大悲の光明は、我等農夫をして此荒蕪の心田を耕さしむへく輝き給へり、農夫よ疾く長夜の眠より醒めて汝か心田を耕すへし、大に富み大に豊かならんと欲せば此荒蕪せる心田を耕し、速かに菩提の善苗を植ふべし、佛陀大悲の光明は、此善苗をして生長し成熟せしめ給ふのである、如何にして我等か荒蕪せる心田を耕やし、菩提の善苗を植ふへき、曰く『信』唯信の一字である、佛陀の御力を信じ佛の御法を信するるのである、涅槃經には信は是れ菩提の因なりと説き、華嚴經には信はこれ道の元功德の母と説いてある、此



信の一字は一切衆善の源、萬行の根本である、信とは疑なきを曰ふ、些しの疑念も捜むことなく、佛の御力、佛の御法を信し奉るのてある、無始已來の執權執迹の迷執を切拂ひ久遠實成の佛の本願力を信し顯本遠壽の妙法蓮華經を信し奉る、其信心の當處即ち菩提の善苗を植へたのである、是本因妙と言ふ、此信の善苗は遠からず其菓實を結ぶのである、其菓實とは即ち、三十二相八十種好を具足し常樂我淨の四德波羅密を滿したる佛の極樂である、我等但信無解の小行に依て佛莊嚴の大果報を得るのである、故に佛此教を説き給ふ時四大聲聞の領解に曰く、飢國より來つて忽ち大王の購に遇へるか如しと又曰く、無量の珍寶求めずして自ら得たりと、我等貧窮の衆生忽ちにして大果報を得ることを領解せられたのである、我等一念此妙法を信すれば、信念忽ち佛の大悲の願海に流入し、内薰外薰相應して極樂に至るを得のである、故に此妙法を信する人は即ち無始已來荒蕪せる心田を開拓して大菩提の善苗を植へたるの人なり、秋收冬藏の結果を見んこと、疑なきなり、如是の人を靈に於て富めるもの豊かなるものと言ふのである、貧しき一切衆生、飢へたる一切衆生、備等速に菩薩の寸心を起して大に富むべし大に豊かなるべし、佛陀大悲の光明は備等貧しき衆生を故はんとして輝けるにあらずや、備等速に長夜の眠より醒めよ、醒めて佛陀の御力を信し御法を信せよ、備等忽ちに富まん、忽ちに豊かな

るべし、宗祖の曰く生死の長夜を照らす大燈明元品の無明を切る大利劍なりと、此妙法蓮華經の五字は備等貧しき衆生の爲の打手の小槌なり、一切衆善は此妙法より出て一切の萬行は自ら具足せり、故に此妙法を信すれば一切の衆善萬行自ら受得す、宗祖の曰く釋尊の因行果徳の二法は、悉く妙法蓮華經の五字に具足す、我等此五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り與へ給ふなり、と又曰く、佛大悲を起して妙法五字の袋の内に此球を埋み未代幼稚の頭に懸さしむ、と釋尊の因行果徳の二法一念に受得す、大に富めるものと云ふへきてある、日蓮聖人の「日蓮は日本第一の富めるものなり」と言ひしは此意である、此者東北地方の一貧民、其身飢渴に迫るも、向佛陀の大悲を信し心神大に安かるとを物語りたりと、靈に於て貧しき者速に來つて佛陀の慈光に浴し備か靈をして大に富ましめ、大に豊かならしめよ、

法華經の佛性

鈴木孝碩

凡る佛敎には皆成佛を説明するも、其の成佛の點たるや何物か眞の佛種にして而も如何なるものなるやと明らめずんば非ず、抑も成佛とは目的物にして、此の目的を達せんとするには目的其の物に力を入るゝと共に亦如何にして目的を達し得らるゝかを推究せずんばあるべからず、迷へる吾人が理

不盡にも唯々佛の報を得ん者とのみ思惟するに至らば、何れの世にか自己の憶想を遂行する事を得んや、世人の所謂大欲は無欲に似たりとは之等を云ふならん、故に先ず佛に成らんと欲せば佛種を吾人の心田に植へて現在に愚か未來世に於ても植へたる佛種に違はざる様注意して、益々全力を注で満足を遂ぐべき也、今謂ふ處の佛種に二あり、一は吾々生れながらにして持ち來りし處の正因佛性是也、二は信念の力にあらざれば到底得べからざる處の緣因佛性及び了因佛性はなり、此の二者和合して始めて眞の佛性と云ひ得べく、若し二者和合せずんば煩惱の爲めに吾人に既に含有する處の佛性も奪れ去れしかの如くにして、無佛種全様となるべきなり、故に傳教大師の曰信心無して經を讀む者は蛙の鳴くか如く、又曰信心なくして佛を禮拜する者は木人の躍るか如し、されば信念なくして佛種を植へ得ざる者は佛種ありと雖も佛種なきが如し、如何に理の佛種ありとも如何に性の佛種ありとも事の佛種、修の佛種を植へざれば、到底完全圓滿なる佛種と斷言し得べからざる也、釋迦一代四十年間の經々の全体の要を取て以て一言して是れを言はば、正因佛性を説明したる者に非ずして、眞實なる正因佛性を明せしは即ち法華經なり、故に法華經方便品に云如我等無異と説けり此れと思ひ此れを思へば、我等か佛性と佛の佛性との差異なきを明せしは、即ち法

華經なり、此の法華經の說に依りて我等衆生の佛性と佛の佛性と一体なりと信する者には一体となり、爾らざる不信者の者には一体とならざるなり、されば、初心成佛抄に云、凡る妙法蓮華經と者我等衆生の佛性と梵天帝釋等の佛性と舍利弗日蓮等の佛性と文殊彌勒等の佛性と三世の諸佛の解の妙法と一体不二なる理を妙法蓮華經と名けたるなり、故に一度も妙法蓮華經と唱ふれば一切の佛一切の法一切の菩薩一切の聲聞一切の梵天帝釋及至一切衆生の心中の佛性を唯一音に喚び顯し奉る功德無量無邊也我か己心の妙法蓮華經を本尊とわかめ奉て我か己心中の佛性南無妙法蓮華經とよびよばれて顯れ玉ふ處を佛とは云ふ也云云、聖惠問塔抄云只南無妙法蓮華經とだにも唱へ奉らば滅せぬ非や有るべき、來らぬ福や有るべき眞實也、甚深也、又曰愛に小か大を兼、一か多きに勝ると云ふ事、是れを思へ彼の尼狗類樹實は芥子三分か一のせい也、されども五百輛の車を隠す徳あり、是れ小か大を含めるにあらずや、又如實寶珠は一つあれども萬寶を雨らして欠くる處なし是又小か大を兼たるにあらずや、世間の謔にも一は萬か母と云へり、又曰妙法蓮華經と一切衆生の佛性なり佛性と法性也、法性とは菩薩也、又曰く法華一部の功德は只妙法蓮華經の五字の内に籠れり、一部八卷文々ごとに二十八品の旨趣は替はれども首題の五字は全等也、譬へば日本の二字の中に六十余州島二つ入らぬ國やあるべき籠らぬ郡やあるべき



飛鳥と呼ばゞ空をかる者と知り走獸と云へば地を走る者と心得る一切の名の大切なる事蓋し以て如是云云、噫々此の御書の意を仰で我等か心田に植ゆるは果して何物なるかを思惟し來ば法華經は唯佛佛の性質を各方面より論じられし者にして吾人の寶篋とすべき佛性は則ち妙法蓮華經の外に是れなき也故に末法下種なる吾人衆生は余念をまじゑずして法華經に於て説明せられし佛の如我等無異の文に依り、果上の妙法を信じて吾人に具備せる處の妙法と融和合同して、片時も早く迷界を脱して、以て速に佛界に到達し朗然たる月を靈鷲山の峰に詠めん事疑なし、可信、々々、



大僧正本多日生現下岡山御留駕中御病氣の際には法統諸君より御見舞狀に接し難有候追々御快方一向はせられ目下は自坊品川妙國寺に於て御静養に付紙上を以て御謝辞旁右申上候也  
五月十五日 隨行員 松尾忍水

### 哲學館第三回夏期講習會要項

- 一、開講時間 明治三十六年八月一日より十五日まで
- 一、講習場所 哲學館講堂
- 一、講習料 金貳圓五拾錢
- 一、講習料 希者には出席費を案して講習證を附與すべし
- 一、講習料 聴講志望者は氏名住所を記し七月廿五日迄に聴講料を添へ東京小石川區原町哲學館へ申込み聴講券と受取るべし

### 附則

- 一、講習中 止宿望の者は半月若くは一ヶ月間を限り寄宿舎に入舎を許す
- 一、入宿望の者は左の舍費食料を支拂ふべし
- 一、半月以内入宿は舍費金壹圓、食料凡金貳圓五拾錢（本館々々友以上は舍費半額に減す）
- 一、一ヶ月以内入宿は舍費金壹圓五拾錢、食料凡金五圓（本館々々友以上は舍費半額に減す）
- 一、但し夜具蒲團は自辨のこと（可成國元より持參するをよしとす）
- 一、舍費は聴講料と合して申込の節同時に本館へ向け送金すべし、食料は入舎の節必ず半月分丈前納すべし
- 一、入舎の節は必ず東京市内居住者にして身元確實なる者を保證に立つべし、村役場又は町村長の證明あれば此儀に及ばず
- 一、その他はすべて寄宿舎の規則を守るべし
- 一、寄宿舎員は近傍の監督下宿所へ紹介すべし
- 一、明治三十六年 月 町（字難聲ヶ窪）

哲學館

日本之柱 主筆佐野實孝 毎月十五日發行  
一部金五錢 一年分前金五十錢  
發行所 大坂市東區中寺町 立正社

教友雜誌 主筆武田宜明 毎月二回發行  
一部金五錢 一年分金壹圓廿錢  
發行所 甲府市稻門村 教友社

北友雜誌 主筆松森靈運 毎月十八日發行  
一部金五錢 一年分金六十錢  
發行所 東京市小石川區白山大乘寺内 北友雜誌社施本部

輪王 主筆川合妙鏡 毎月十五日發行  
一部金一錢 一年分金十二錢  
發行所 東京芝二本樓一丁 輪王新聞社

ひろめ 編輯阿倍正尹 當分毎月一回發行  
一部金四錢五厘 一年分金五十四  
發行所 岡山市野田屋町四八番 ひろめ發行部

## 高輪學報

第十號（五月五日發行）

- ◎有神論證に就て 研究 内田融
- ◎佛教倫理の梗概 補原龍督
- ◎虛無僧考 實閣善教
- ◎櫻の東京 岡林 岩田雪舟
- ◎波羅門教と印度教 佐竹模堂
- ◎佛教の研究 北村教嚴
- ◎將來の宗教 芳村昌南
- ◎占守島 郡司成忠

東京市芝區 高輪佛教大學 學友會發行  
一部金十錢 半年分 五錢 一ヶ年分  
一圓但郵稅不要  
英大無量壽經和譯 藤井芳信



發行所

東京駒込  
片町十六

新佛教徒同志會

▲人間の二階段

渡邊又次郎

○霜の白菊

千代

▲品性を論ず

杉村 縦横

○受動的宗教家

伊藤左千夫

▲古今迷信の變遷

加藤 咄堂

○何事も

青 侍

▲佛耶二教の根本義

嶋地 嘿雷

○耳 聾 日記

柳 南

▲將來之宗教

内村 鑑三

○面白日記

田中 智學

▲大なる國民の特性

中嶋 徳藏

○わか井

秀 眞

▲收賄事件の意義

境野 黄洋

○續訪問餘録(二)

第二訪問子

▲小兒の天職

淡霞 女史

○大森閑語

巖 横

▲法華經の眞實

清水友次郎

發賣所

東京小石川原町三

鷄聲堂書店

新 佛 教

定價郵稅共一部拾壹錢五分六厘四分一厘  
明治卅六年四月一日發行第四卷第四號要目

妙好華

每月一回(十日)定期刊行  
一部郵稅共金五錢十二部五錢

佛教によりて品性を涵養せんとする者、佛教によりて信仰を樹立せんとする者、日本に於て最後に開けたる佛教を知らんとする者は是非本誌を讀まざるべからず、

第三年第四號(四月十日發行)要目

- 還相回向を忘れたる宗教家……………記 者
- 時宗教理概論……………成阿 惠勝
- 佛教と社會事業……………文學博士 井上 圓了
- 責任……………星臥 雲庵
- 御風放言……………白雲居真人
- 教界時弊……………門外 漢
- 對本化妙宗獅子王學衆論……………星臥雲庵
- 宗教的施設論……………橋 御 風
- 歌・詩數十首……………

購讀申込所

清蓮社事務所

改姓廣告

小生義師範沒後復籍(實家へ)して姓を古定と改め候此段辱知諸君に及廣告候也

上田 事

古定 賢正

御

雜

人形

附と小道具

武

者

人

形

東羽子板

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店

久月本店

中原福藏

(電話本局二千三百八十二番)

岡 山

服 商 吳

柿屋本店

主 店 久 城 茂 太 郎 (番 〇 六 二 話 電)

柿屋 店

(岡山市上之町)

柿屋太物店

(岡山市上之町)

柿屋南店

(岡山市上之町)

柿屋北店

(岡山市車町筋)

柿屋鼈甲店

(岡山市中之町)



佛旗六金色調進所 六金色價表

御寺院御幕	種形別並品製上品製新友仙本友仙染抜
在家用廿二錢	廿八錢卅五錢五十五錢
寺院用四十三錢	五十錢
同極大七十五錢	六十八錢
	〇 一圓三十錢
	〇 二圓二十錢

右外別大特大最大數種●國旗本友仙染抜四十五錢  
御寺院用御幕●唐縮緬紫幕●天竺木綿及五郎丸白幕  
京都市油小路魚棚南 吳服商 高橋正意  
御本山御用調進所

六社同盟購讀料 滯納者處分法

雜誌購讀料を滯納し遂に其支拂を果さざるものは各社互に其姓名及事由を通告し其甚しきものは之を同盟各紙上に掲示することあるべし

教友雜誌 日本之柱 宗統 友新報 日北友雜誌 妙宗統一誌

明治卅五年八月二日伊豆伊東に於て之を決議す

團告

本誌全國各停車場待合室備付に對し其舉を賛し毎月補助金を申込まれし奇特家は左の如し

- 岡山 久城茂太郎殿
- 姫路 中村祐七殿
- 東京 中村福藏殿
- 神戶 齋藤金太郎殿
- 吳市 木村孝殿
- 品川 大島良太郎殿

千葉縣内左の各區本誌購讀料集金の義今般左の各師へ依嘱候間何卒諸師の内へ御拂込被下度願上候也

- 第三教區 長生郡押日來光寺 山田日廣師
- 第四教區 全郡澁谷行光寺 前田日應師
- 第六教區 山武郡清名幸谷東光寺 草切榮玉師
- 第七教區 全郡御門妙善寺 飛山日甫師

他教區は追て依嘱人名報告可致候  
明治三十六年三月 統一團

注意

本誌廣告

本誌は既に全國各停車場へ備付居れり  
本誌月定め購讀者へは

法の鼓と代無添付

（旧月定購讀にして代金拂濟のお方のみへ）  
毎月一回發行法の鼓は至極平易の文字にして法話あり小説あり、最と可愛らしき冊子也

讀者諸君

「統一」の隆盛と發達を成さしめ給ふは單に購讀者諸君の爲され方一ツ也 諸君が購讀料を拂つて下さらねば「統一」は衰退の止を得ぬ次第になります  
諸君の方では月々僅かの購讀料でも、團の方ではうれが頗る多額になるわけですから、此へん御察しを願いたい  
又「統一」は前號より全國各停車場に備付の事もあり月々購讀者諸君には法の鼓を添付することに成りましたから、勞々運轉の油、つまり雜誌代を早く拂ひ込んでもらいたいののであります

統一團會計部

本團發行の法の鼓を施本せよ、布教雜誌としては恰好のもの也、委細廣告にあり

一本誌代金不納の諸君は至急御送金ヲ乞  
一雜誌交換、寄稿共移轉先へ願升

- 一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
- 一本誌は一冊八錢十二冊前金八十六錢廿四冊前金一圓七十錢郵券代用は一割増但五厘切手を具さす
- 一購讀申込の節は住所姓名を附書にて認めらるべし
- 一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
- 一本誌は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するべし
- 一爲替振込の節拂渡通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
- 一廣告料は五錢活字廿七字詰每一行金八錢なり

明治卅六年五月十五日印刷發行

發行人 井村恂也  
編輯人 山根顯道  
印刷所 鈴木曄學  
北澤活版所

發行所 統一團  
東京市淺草區南松山町四十五番地



# 統一

第九十八號要目

- 日蓮上人の釋迦牟尼佛觀(上)……古定 不新
- ▲厭世宗に厭世排斥の聲これ何の兆ぞ……………
- 哲學者の不可解は宗教の信……………松尾 忍水
- ▲嗚呼公明正大なる哉日蓮の戰爭主義……………くれがし生
- 日蓮大聖人(第八回)……………關田 養叔
- ▲見ぬ「英雄僧日蓮」を評す……………
- 統一論壇の一小論文村上博士の……………不新
- ▲獅子吼の齋藤氏と日宗の加藤氏……………鷹の 眼生
- 佐渡の雪……………笹川 篁堂
- ▲噫不任快新聞を起すべきか……………
- 大日蓮の論評に就て……………窪田 孤松
- ▲僧侶とならんとする吾夫に呈するの書……………うれの 妻
- うつき旅の詩……………忍 水
- ▲宗徒大會大阪に開かる……………
- 果敢より離れし心地の平靜……………忍 水

(明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可) 毎月一圓十五日  
(大正十六年六月十五日發行統一第九十八號)

## 山根顯道校訂 顯本法華宗要品 並回向文

貳號活字總ふりかな附

▲用紙上等黃仙花  
▲印刷最鮮明体裁頗美麗  
▲一部印刷費郵費共十四錢  
▲五十部以上一冊十三錢  
▲百部以上一冊十二錢(の割)

此要品は顯本法華宗初心行者の爲めに校訂出版せしものにして、貳號活字總ふりかな附なれば、如何なる老眼にても判明に、如何なる婦女子にても「いろは」四十八字を讀み得る人ならば、易々と獨習の出來得る要品であります。實費にて頒興致します、但し前金ならでは郵送しませぬ。

東京府荏原郡品川町南馬場  
頒與所 妙蓮寺

## 移轉廣告

今般本社左記之處へ移轉ス  
山梨縣東山梨郡休息村  
教友社

自今購讀料並ニ廣告料(送金ハ勝沼局宛ノ)寄書交換雜誌等總テ本社ニ係ル諸用ハ右移轉先へ宛ラレ度候

## 法の鼓

本誌

本誌は頗る愛らしき小雜誌なり  
本誌定價  
一部 二錢  
壹年ヶ前金 二十錢  
十部以上 一錢五厘宛  
五十部以上 一錢二厘宛  
本誌には祖訓、説教、小説、和歌等あり

今般統一團より本誌を毎月一回發行致し只の印刷費のみにてお求めに應ずる事に致しましたから何卒篤志の御方は檀家又は知人へ施本用として御買求め下さい澤山印刷すれば其だけ價を割引ますから續々御注文を乞ふ  
○今日の良布教方法は

### 「法の鼓」を

施本するに限りせず、小供でも婦人でも假名さへ讀める人は讀んで解る良雜誌  
○施本には限らず本誌購讀方もお勧め下さる

東京淺草南松山町  
統一團